

平安京左京三条四坊一町跡
発掘調査報告書

2 0 2 1

株式会社 文化財サービス

例 言

- 1 本書は、京都市中京区間之町通二条下る鍵屋町 488,492・同区押小路通高倉西入左京町 135 で実施した、平安京左京三条四坊一町跡の発掘調査成果報告書である。(京都市番号 21H182)
- 2 調査は、足立病院新病棟建設に伴い実施した。
- 3 現地調査は、平安埋蔵文化財株式会社より株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、大西晃靖、早見由槻（文化財サービス）が担当した。
- 4 調査期間は令和3年8月20日～9月24日である。
- 5 調査面積は 88 m²である。
- 6 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.（東京湾平均海面高度）である。
- 7 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 本書の執筆は大西が行い、編集は大西、野地ますみ（文化財サービス）が行った。
- 9 現地での記録写真撮影は大西が行い、出土遺物の撮影は写房 楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。
- 10 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 11 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。
 - 〔発掘調査〕 辰巳陽一、菅田 薫、田中慎一、小林一浩、上田智也、吉岡創平、清須慶太（以上、文化財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）
 - 〔整理作業〕 山内伸浩、望月麻佑、田中慎一、吉川絵里、森下直子、古谷眞由美、野地ますみ、神野いくみ、甲田春奈、若山美帆、内牧明彦、溝川珠樹（以上、文化財サービス）
- 12 出土遺物の年代観は、主に下記の文献に依った。
 - 平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2019 年中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995 年
 - 『平安京左京北辺四坊－第 2 分冊（公家町）－』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004 年
- 13 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。（敬称略）
 - 國下多美樹（龍谷大学）、畑中英二（京都市立芸術大学）

目次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	3

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	6
2 既往の調査	6

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	13
2 検出遺構	13
(1) 第1面	13
(2) 第2面	17
(3) 第3面	22
3 出土遺物	24
(1) 土器・陶磁器類	24
(2) 瓦	33
(3) 土製品	33
(4) 石製品	34
(5) 木製品	35
(6) 獣骨	37

第Ⅳ章 まとめ	41
---------	----

図版目次

図版1 遺構	1. 第1-1面全景(西から)	2. 井戸28(南東から)
図版2 遺構	1. 第1-2面全景(西から)	2. 溝41(東から)
	3. 石室40(北から)	
図版3 遺構	1. 第2面全景(西から)	2. 土坑46・48状況(北から)
図版4 遺構	1. 土坑25・50(南から)	2. 土坑25遺物出土状況(東から)

図版5	遺構	1. 第3面全景(西から)	2. 第3面土坑群掘削状況(北から)
図版6	遺構	1. 調査区北壁断面(南から)	2. 調査区南壁断面(南から)
図版7	遺物	1. 出土遺物1(土坑50)	2. 出土遺物2(志野)
図版8	遺物	1. 出土遺物3(土坑25出土土師器・土製品)	
		2. 出土遺物4(土坑25出土染付)	
		3. 出土遺物5(土坑25出土唐津)	
図版9	遺物	1. 出土遺物6(土坑25・50出土志野)	
		2. 出土遺物7(土坑25出土天目茶碗)	
図版10	遺物	1. 出土遺物8(土坑25出土焼締陶器)	
		2. 出土遺物9(焼締陶器 四耳壺)	
		3. 出土遺物10(焼締陶器 播鉢)	
図版11	遺物	1. 出土遺物11(土坑33出土土師器・土師質土器)	
		2. 出土遺物12(土坑33出土施釉陶器 甕)	
		3. 出土遺物13(土坑33出土施釉陶器)	
図版12	遺物	1. 出土遺物14(土坑33出土染付)	
		2. 出土遺物15(取瓶・埴塼・炉壁)	
図版13	遺物	1. 出土遺物16-1(木製品 蓋・下駄-表)	
		2. 出土遺物16-2(木製品 蓋・下駄-裏)	
図版14	遺物	1. 出土遺物17-1(土坑42出土荷札)	
		2. 出土遺物17-2(土坑42出土荷札)	3. 出土遺物18(漆器 椀)
		4. 出土遺物19(曲物)	

挿図目次

図1	調査地位位置図(1:2500)	1
図2	発掘調査経過写真	2
図3	調査区、基準点配置図(1:300)	4
図4	調査区地区割図(1:80)	5
図5	既往調査位置図(1:5,000)	7
図6	調査区土層断面図1(1:80)	14
図7	調査区土層断面図2(1:80)	15
図8	第1-1面平面図(1:80)	16
図9	第1-2面平面図(1:80)	18
図10	石室40平面立面図、土坑36平面断面図(1:40)	19
図11	第2面平面図(1:80)	21
図12	第3面平面図(1:80)	23
図13	出土遺物実測図1(1:4)	24

圖14	出土遺物実測圖2 (1:4)	25
圖15	出土遺物実測圖3 (1:4)	29
圖16	出土遺物実測圖4 (1:4)	31
圖17	出土遺物実測圖5 (1:4)	32
圖18	出土遺物実測圖6 (1:4)	34
圖19	出土遺物実測圖7 (1:4)	34
圖20	出土遺物実測圖8 (1:4)	35
圖21	出土遺物実測圖9 (1:4)	36
圖22	獸骨	37

表目次

表1	既往調査一覽表	9
表2	遺構概要表	13
表3	遺物概要表	24
表4	出土遺物觀察表	38

第 I 章 発掘調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯 (図1)

京都市中京区間之町通二条下る鍵屋町488・492、同区押小路通高倉西入左京町135において病院の新病棟建築が計画された。建設予定地は、平安京左京三条四坊一町跡にあたる為、建設に先立ち京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が実施されることとなった。建設予定地の2か所に試掘トレンチが設定され、試掘調査を実施したところ、平安時代～江戸時代にかけて複数の遺構面が確認された。以上により発掘調査が実施されることとなった。当初、文化財保護課より調査指導のあった面積は514㎡であったが、その後、建物基礎の構築には地下遺構に影響が出ない工法が採用されたため、地下ピットが設置される敷地北東部の88㎡が調査対象となった。発掘調査は、平安埋蔵文化財事務所株式会社から株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託された。

2 発掘調査の経過 (図2)

発掘調査は、8月20日に調査区を設定し、文化財保護課の検査を受けた後に同日重機による表土掘削を開始した。近現代の造成土である1～3層まで重機で掘削し、4層以深は人力による調査を実施した。4・5層上面を第1面、6層上面を第2面、第2面の遺構を完掘した後に下位で検出した遺構群を第3面とした。第1面は、4層上面を1-1面、5層上面を1-2面と区分

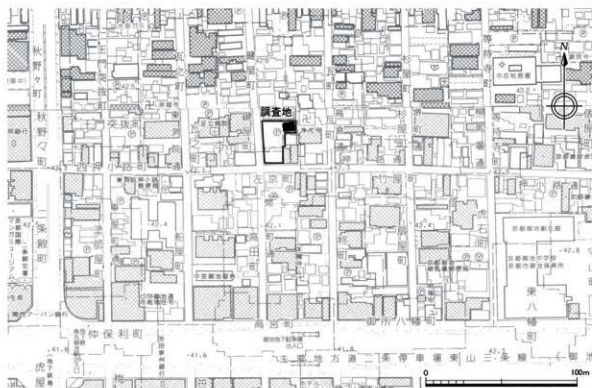


図1 調査地位置図 (1:2,500)



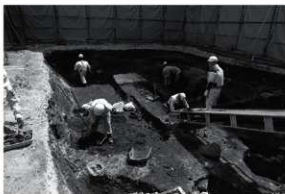
1. 調査前 (西から)



2. 重機掘削 (北東から)



3. 地区杭設置状況 (西から)



4. 第1面調査経過 (北西から)



5. 第2面調査状況 (北西から)



6. 第3面調査経過 (北西から)



7. 検証委員園下氏による視察 (南東から)



8. 京都市文化財保護課による検査 (西から)

図2 発掘調査経過写真

して調査を実施した。各遺構面で図面作成及び写真撮影による記録作業を実施し、第3面の遺構を完掘した後調査区壁面の土層断面図を作成した。全ての記録作業を9月22日に終了し、9月24日に資材を撤収して現地調査を終了した。

なお、写真撮影機材は、35mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35mm白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の検査および指導を受けた。また、現地調査・整理時に、文化財保護課選定の検証委員である龍谷大学教授岡下多美樹氏、京都市立芸術大学教授畑中英二氏による視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

3 測量基準点の設置と地区割り (図3・4)

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にP1、P2を設置し、その2点からトータルステーションによりP3、P4を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

P1	X = -109.516353 m	Y = -21.737169 m	H = 42.886 m
P2	X = -109.529355 m	Y = -21.739992 m	H = 42.810 m
P3	X = -109.513053 m	Y = -21.727182 m	H = 43.036 m
P4	X = -109.511855 m	Y = -21.714956 m	H = 43.259 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して3mグリッドを設定した。Y軸にアラビア数字を西から東に、X軸にアルファベットを北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。地区名は、グリッドの北西角を基準とした。

4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した大西見靖、編集作業は野地ますみが担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

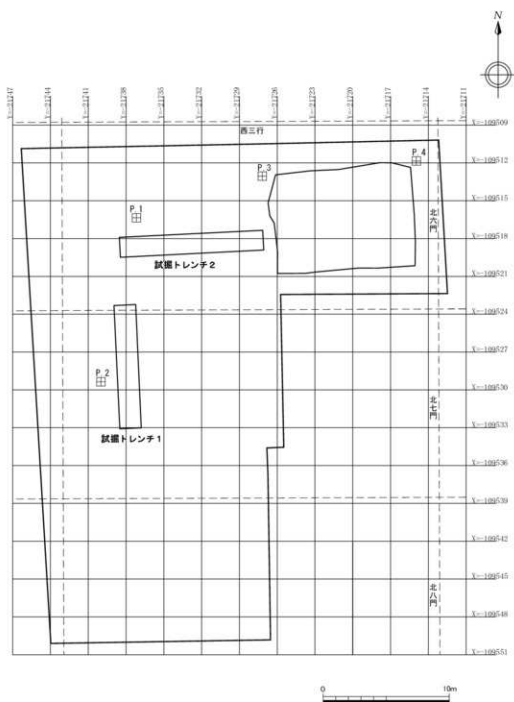


図3 調査区、基準点配置図 (1 : 300)

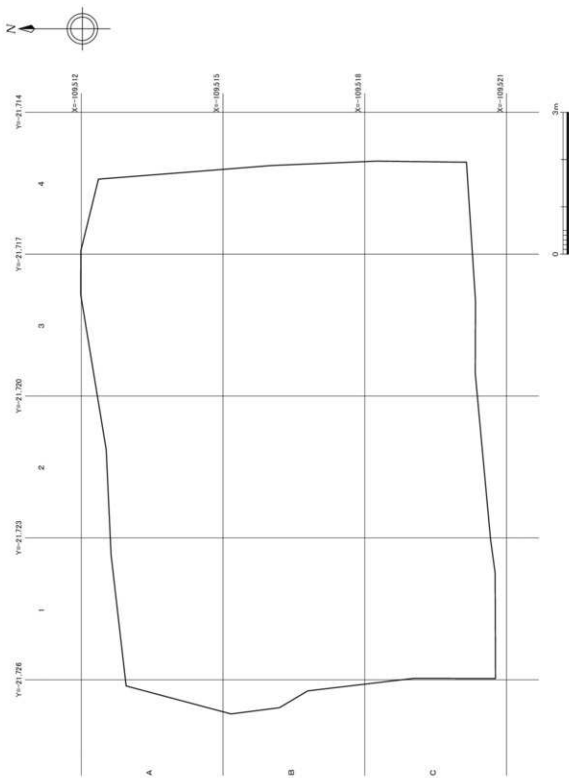


图4 调查区地区剖面 (1:80)

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境

調査地は平安京左京三条四坊一町跡にあたり、四行八門では西三行北六門に位置する。本宅地は、平安時代には清和天皇の皇后藤原高子（陽成天皇母后）の御所である小二条院（山吹殿）が所在した。その後、この邸宅は左大臣藤原師尹から権大納言源俊賢へ受け継がれたが、長和五年（1016）に焼失した（『御堂閨白記』同年八月二八日条）。その後は内大臣藤原教通が入手し、万寿二年（1025）から南側の左京三条四坊二町と合わせた二町にまたがる「二条殿」と呼ばれる邸宅が新築された。二条殿は、後朱雀天皇の里内裏（長久元～二年）、後冷泉天皇の里内裏（永承元年、治暦四年）、後三条上皇の御所（延久四年）としても使用されている。

保安四年（1123）には鳥羽上皇の御所として新たに二条東洞院殿が造営され（『百鍊抄』同年六月十日条）、崇徳天皇はこれを受け継ぎ里内裏としたが、間もなく焼失した（『百鍊抄』保延四年二月二四日条）。

鎌倉時代には、建久九年（1198）、後鳥羽上皇は本宅地及び南隣する二町の北半を含め一町半にわたる敷地に御所を新造し遷御した（『三長記』同年四月二一日条）。しかしながら、この御所は建仁三年（1203）に焼失している。

室町時代には、調査地周辺は上京と下京の両都市に挟まれた中間地となり、都市化の進んでいない地域であった。

豊臣秀吉が実施した天正地割により、本宅地を東西に二分するように間之町通が新たに開かれ、調査地は間之町通に面した町屋となる。調査地周辺は、江戸時代に入り本格的な発展を遂げ様々な職商が展開することになるが、『京羽二重』によれば間之町通沿いにはキセル屋・練物張物屋・つづら屋などがあったようである。

参考文献

『平安京提要』 角川書店 1994年

『史料京都の歴史9 中京区』 平凡社 1985年

2 既往の調査（図5）

今回の調査地である左京三条四坊一町では、本調査地北西での立会調査が1件あるのみで（立会31）その際に鎌倉時代の包含層が検出されている。また、隣接する町においても試掘・立会調査が主であり発掘調査の件数は少ない。

周辺での主な発掘調査について、以下に記述する。

三条三坊九町では2件の調査（調査1・2）があり、調査1では平安時代前期の柱穴、室町時代の欄、桃山時代～江戸時代前期の堀状遺構・井戸・欄、江戸時代の井戸・路面・建物、調査2では桃山時代～江戸時代前期の土坑・柱穴・溝・漆・欄・石垣などが検出されている。

三条三坊十町では4件の調査（調査4・5・8・9）があり、調査4では平安時代後期～鎌倉

時代の溝・石敷・柱穴・集石、室町時代の土坑、江戸時代の土坑・井戸・溝、調査5では平安時代～室町時代の井戸・建物・池・石垣・土坑・柱穴、桃山時代～江戸時代の石垣・井戸・土坑・柱穴、江戸時代後期の建物・柵・石室・土坑・柱穴、調査8では平安時代の土坑・溝、鎌倉時代～室町時代の土坑・溝・堀・瓦敷遺構、安土桃山時代～江戸時代の竈・井戸・土間・石組・土坑・炉・溝・石室、調査9では平安時代後期の烏丸小路側溝・井戸、鎌倉時代の烏丸小路西側溝・井戸、室町時代の溝・井戸・柱穴、江戸時代の石垣・池・井戸・石室・土坑がそれぞれ検出されている。

三條三坊十一町では2件の発掘調査（調査12・13）があり、調査12では烏丸小路西側溝、平安時代の門跡、室町時代の集石・土坑墓、調査13では烏丸小路西側溝、平安時代の井戸、鎌倉時代の溝、室町時代の井戸が検出されている。

三條三坊十二町では3件の発掘調査（調査15～17）があり、調査15では平安時代末～鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の井戸・土坑・柱穴、調査16では鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の井戸・土坑・柱穴、調査17では平安時代後期の姉小路南築地内溝・土坑、鎌倉時代～室町時代の柱穴・土坑・溝状遺構、室町時代後期～江戸時代前期の柱穴・土坑・溝状遺構・井戸が検出されている。

三條三坊十三町では2件の発掘調査（調査18・19）があり、調査18では東洞院大路路面・西側溝、平安時代の井戸、室町時代の井戸・池・土坑・柱穴・堀、調査19では室町時代の池・滝・脚・遺水・

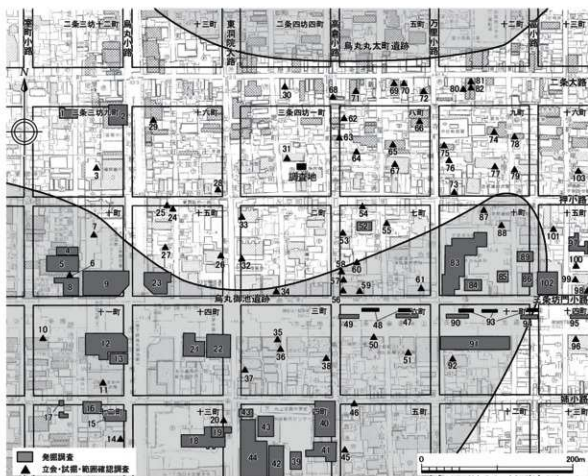


図5 既往調査地位置図（1：5,000）

泉・建物・土坑が検出されている。

三条三坊十四町では2件の発掘調査（調査21・22）があり、調査21では平安時代中期の溝、鎌倉時代の溝・土坑・柱穴・堀、室町時代の井戸・土坑・堀、調査22では東洞院大路路面・西側溝、鎌倉時代～室町時代の溝・井戸、室町時代後期の堀が検出されている。

三条三坊十五町の調査（調査23）では平安時代～室町時代の土坑・池・堀・掘立柱群、室町時代の土坑墓・溝・掘立柱群、江戸時代の天秤工房跡と想定される井戸・土坑・塀などが検出されている。

三条四坊四町では6件の発掘調査（調査39～44）があり、調査39では、室町時代の井戸・土坑、調査40では高倉小路西側溝・平安時代後期～室町時代の井戸、調査41では高倉小路西側溝、調査42では三条大路北側溝、調査43では東洞院大路東築地・平安時室町鎌倉時代の井戸、室町時代の溝・堀・土坑、調査44では東洞院大路東側溝がそれぞれ検出されている。

三条四坊六町では2件の発掘調査があり、調査47では室町時代の土坑、調査49では平安時代の土坑などが検出されている。

三条四坊七町の調査（調査52）では弥生時代の流路・平安時代の地割溝・室町時代等持寺の堀跡・桃山時代の池などが検出されている。

三条四坊十町では4件の調査（調査83～85・89）があり、中でも調査83では江戸時代前半の真鍮生産に関する大規模な工房跡が検出されている。

三条四坊十一町では3件の発掘調査（調査90～92）があり、調査90では室町時代後半の鋳造に関する遺構遺物、調査91では平安時代後期の園池・鎌倉時代の溝・井戸・柱穴群・土坑など、調査92では平安時代～室町時代の土坑などが検出されている。

表1 既往調査一覧表

調査No.	調査地点	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	左京三条三坊九町	発掘	平安時代前期の柱穴、室町時代の欄、桃山時代～江戸時代前期の堀状遺構・井戸・欄、江戸時代の井戸・路面・建物を検出。	『平安京左京三条三坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-15 埋蔵2006年
2	左京三条三坊九町・烏丸小路・二条大路	発掘	桃山時代～江戸時代前期の土坑・柱穴・井戸・溝・溝・欄列・石垣を検出。	『平成元年年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1993年
3	左京三条三坊九町	立会	室町時代以前の井戸、中世の落込・包含層、中近世の池状埋構を検出。	『京都市内道路立会調査概報 平成10年度』文化市民局 1999年
4	左京三条三坊十町・烏丸御池遺跡	発掘	平安時代後期～鎌倉時代の溝・石敷・柱穴・兼石、室町時代の土坑、江戸時代の井戸・土坑・溝を検出。	『平安京左京三条三坊十町（押小路殿、二条殿）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-8 埋文研 2007年
5	左京三条三坊十町・烏丸御池遺跡	発掘	平安時代～室町時代の井戸・建物・池・石・石垣・土坑・柱穴、桃山時代～江戸時代の石垣・井戸・土坑・柱穴、江戸時代後期の建物・欄・井戸・石室・土坑・柱穴を検出。	『平安京左京三条三坊十町（押小路殿、二条殿）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-7 埋文研 2002年
6	左京三条三坊十町・烏丸御池遺跡	試掘	江戸時代の土坑、幕末の建物を検出。	『京都市内道路試掘調査報告 平成19年度』文化市民局 2008年
7	左京三条三坊十町・烏丸御池遺跡	試掘	中世の土坑を検出。	『京都市内道路試掘調査報告 平成18年度』文化市民局 2007年
8	左京三条三坊十町・烏丸御池遺跡	発掘	平安時代の土坑・溝・落込、鎌倉時代～室町時代の土坑・溝・溝・瓦敷遺構・落込、安土桃山時代～江戸時代の礎・井戸・土間・落込・石組・土坑・炬・溝・石室を検出。養生土塁を採取。	『平安京左京三条三坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-20 埋文研 2010年
9	左京三条三坊十町・烏丸御池遺跡・烏丸小路	発掘	平安時代後期烏丸小路溝・井戸、鎌倉時代の烏丸小路西側溝・井戸、室町時代の溝・井戸・柱穴・土坑、江戸時代の石垣・池・井戸・石室・柱穴・土坑を検出。	『押小路殿の研究』『平安文化の研究1』平安博物館研究紀要第2輯 財団法人古代学協会 1971年
10	左京三条三坊十一町・烏丸御池遺跡	試掘	室町時代後期～江戸時代の包含層、室町時代中期の溝を検出。	『京都市内道路立会調査概報 昭和61年度』文化観光局 1987年
11	左京三条三坊十一町・烏丸御池遺跡	試掘	中世の礎石建物跡・土坑、先史時代の流路跡を検出。	『京都市内道路試掘調査報告 平成17年度』文化市民局 2006年
12	左京三条三坊十一町・烏丸御池遺跡・烏丸小路	発掘	烏丸小路西側溝、平安時代の門跡、室町時代の集石墓・土坑墓を検出。	『平安京左京三条三坊十一町（第2次調査）』平安京研究調査報告第14輯 財団法人古代学協会 1984年
13	左京三条三坊十一町・烏丸御池遺跡・烏丸小路	発掘	烏丸小路西側溝、平安時代の井戸、鎌倉時代の溝、室町時代の井戸を検出。	『押小路殿跡 平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告書第12輯 財団法人古代学協会 1984年
14	左京三条三坊十二町・烏丸御池遺跡	試掘	平安時代後期の整地層、室町時代～江戸時代の井戸・土坑を検出。	『京都市内道路試掘立会調査概報 昭和58年度』1984年 文化観光局
15	左京三条三坊十二町・烏丸御池遺跡・烏丸小路	発掘	平安時代末期～鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の井戸・土坑・柱穴などを検出。	『三條西線跡 平安京跡研究調査報告書第7輯 財団法人古代学協会 1983年（2次）』
16	左京三条三坊十二町・烏丸御池遺跡・姉小路	発掘	鎌倉時代の井戸・土坑、室町時代の井戸・土坑・柱穴などを検出。	『三條西線跡 平安京跡研究調査報告書第7輯 財団法人古代学協会 1983年（3次）』
17	左京三条三坊十二町・烏丸御池遺跡・姉小路	発掘	平安時代後期の姉小路南基地内溝・土坑、鎌倉時代～室町時代の柱穴・土坑・溝状遺構、室町時代後期～江戸時代前期の柱穴・土坑・溝状遺構・井戸を検出。	『平安京左京三条三坊十二町跡・烏丸御池遺跡・柿町における埋蔵文化財発掘調査報告書』イビツ京都市内道路調査報告書第19輯 イビツ社 2018年
18	左京三条三坊十三町・烏丸御池遺跡・東洞院大路	発掘	東洞院大路路面・西側溝、平安時代の井戸、室町時代の井戸・池・土坑・柱穴・堀を検出。	『平安京左京三条三坊』平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要 埋文研 1995年
19	左京三条三坊十三町・烏丸御池遺跡	発掘	室町時代の池・溝・脚・遺水・泉・建物・土坑を検出。	『平安京左京三条三坊十三町跡・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-10 埋文研 2017年
20	左京三条三坊十三町・烏丸御池遺跡・東洞院大路	立会	室町時代の東洞院大路路面・西側溝・堀を検出。	『京都市内道路詳細分布報告 平成29年度』文化市民局 2018年
21	左京三条三坊十四町・烏丸御池遺跡	発掘	平安時代中期の溝、鎌倉時代の溝・土坑・柱穴・堀、室町時代の井戸・土坑・堀を検出。	『平安京左京三条三坊』平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要 埋文研 1995年
22	左京三条三坊十四町・烏丸御池遺跡・東洞院大路	発掘	東洞院大路路面・西側溝、鎌倉時代～室町時代の溝・井戸、室町時代後期の堀を検出。	『左京三条三坊』昭和三十七年度 京都市埋蔵文化財調査概要 埋文研 1984年
23	左京三条三坊十五町・烏丸御池遺跡	発掘	平安時代～鎌倉時代の土坑・池・塚・掘立柱跡（三条坊門押小路殿間道か）、室町時代の土坑墓・溝・掘立柱跡、江戸時代の井戸・土坑・堀（天祥工房跡か）を検出。	『平安京左京三条三坊十五町』2004年 古代文化調査会

調査№	調査地点	調査法	調査成果概要	掲載文献
24	左京三条三坊十五町	立会	室町時代の包含層を検出。	[昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要] 埋文研 1993年
25	左京三条三坊十五町・押小路	立会	桃山時代～江戸時代の池状堆積を検出。	[昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要] 埋文研 1993年
26	左京三条三坊十五町	立会	江戸時代の池状堆積を検出。	[京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度] 文化市民局 2004年
27	左京三条三坊十五町	立会	鎌倉時代の土坑、時期不明の土坑を検出。	[京都市内遺跡詳細分布報告 令和元年度] 文化市民局 2020年
28	左京三条三坊十六町	立会	鎌倉時代の包含層、室町時代の包含層を検出。	[京都市内遺跡立会調査概報 昭和60年度] 文化観光局 1986年
29	左京三条三坊十六町	立会	鎌倉時代前期の落込、鎌倉時代後期の包含層を検出。	[京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度] 文化市民局 2002年
30	二条大路	立会	江戸時代末期の礎土層、包含層を検出	[京都市内遺跡立会調査概報 平成17年度] 文化市民局 2006年
31	左京三条四坊一町	立会	鎌倉時代の包含層を検出。	[昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要] 埋文研 1993年
32	左京三条四坊二町	立会	時期不明の包含層を検出。	[京都市内遺跡試掘立会調査報告 昭和55年度] 埋文研 1981年
33	左京三条四坊二町	試掘	平安時代の土坑・柱穴・井戸、平安時代～室町時代の溝状遺構を検出。	[京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成3年度] 1992年 文化観光局
34	左京三条四坊二町・烏丸御池遺跡	立会	平安時代中期の土坑、鎌倉時代の土坑、室町時代中期の土坑を検出。	[京都市内遺跡立会調査概報 昭和60年度] 文化観光局 1986年
35	左京三条四坊三町・烏丸御池遺跡	立会	中世の包含層を検出。	[京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度] 文化市民局 2000年
36	左京三条四坊三町・烏丸御池遺跡	立会	鎌倉時代の土坑、室町時代の包含層を検出。	[京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度] 文化観光局 1991年
37	左京三条四坊三町・烏丸御池遺跡	立会	鎌倉時代の落込、室町時代の土坑、江戸時代の湿池状堆積を検出。	[京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度] 文化市民局 2004年
38	左京三条四坊三町・烏丸御池遺跡	立会	鎌倉時代の包含層を検出。	[京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度] 文化市民局 2000年
39	左京三条四坊四町・烏丸御池遺跡	発掘	室町時代の井戸・土坑を検出。	[東洞院大路・曼華院跡] 平安京発掘調査報告第8巻 財団法人古代学協会 1983年
40	左京三条四坊四町・烏丸御池遺跡・高倉遺跡	発掘	高倉小路西側溝、平安時代後期～鎌倉時代の井戸を検出。	[平安京高倉宮・曼華院の発掘調査] 財団法人古代学協会 1979年
41	左京三条四坊四町・烏丸御池遺跡・高倉遺跡	発掘	高倉小路西側溝を検出。	[東洞院大路・曼華院跡第4次調査] 平安京発掘調査報告第18巻 財団法人古代学協会 1987年
42	左京三条四坊四町・烏丸御池遺跡・三条大路	発掘	三条大路北側溝を検出。	[平安京左京三条四坊四町] 京都市中央区曼華院前ノ町] 京都文化博物館(仮称)調査研究報告第2集 財団法人京都文化財団 1988年
43	左京三条四坊四町・烏丸御池遺跡・東洞院大路	発掘	東洞院大路東側溝、平安時代後期の井戸、鎌倉時代の井戸、室町時代の溝・井戸・土坑・堀を検出。	[平安京左京三条四坊四町跡] 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-10 埋文研 2003年
44	左京三条四坊四町・烏丸御池遺跡・東洞院大路	発掘	東洞院大路東側溝を検出。	[東洞院大路・曼華院跡] 平安京発掘調査報告第3巻 財団法人古代学協会 1977年
45	左京三条四坊五町・烏丸御池遺跡	立会	室町時代前期の土坑、江戸時代の包含層、時期不明の土坑を検出	[京都市内遺跡立会調査概報 昭和60年度] 文化観光局 1986年
46	左京三条四坊五町・烏丸御池遺跡	立会	鎌倉時代の土坑を検出。	[京都市内遺跡立会調査概報 昭和60年度] 文化観光局 1986年
47	左京三条四坊六町・烏丸御池遺跡	発掘	室町時代の土坑などを検出。	[平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要] 埋文研 1994年
48	左京三条四坊六町・烏丸御池遺跡	立会	室町前半の遺構・遺物を多数検出	[平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要] 埋文研 1997年
49	左京三条四坊六町・烏丸御池遺跡・高倉小路	発掘	平安時代の土坑・遺構を検出。	[昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要] 埋文研 1993年
50	左京三条四坊六町・烏丸御池遺跡	立会	平安時代後期の土坑、平安時代後期～鎌倉時代の包含層を検出。	[京都市内遺跡立会調査概報 昭和60年度] 文化観光局 1986年
51	左京三条四坊六町・烏丸御池遺跡	立会	弥生時代後期～鎌倉時代の包含層、平安時代の土坑、室町時代の土坑、室町時代の包含層を検出。	[京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度] 文化市民局 2006年
52	左京三条四坊七町	発掘	弥生時代の自然土坑、平安時代の地割溝、室町時代の等持寺の堀跡、桃山時代の池などを検出。	[平安京左京三条四坊七町跡・等持寺跡] 国際文化財株式会社 2012年

調査 №	調査地点	調査法	調査成果概要	掲載文献
53	左京三条四坊七町	立会	時期不明の包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成20年度』文化市民局 2009年
54	左京三条四坊七町	立会	平安時代の包含層、平安時代後期の包含層、時期不明の落込を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』文化市民局 2001年
55	左京三条四坊七町	立会	室町時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 昭和60年度』文化観光局 1986年
56	左京三条四坊七町・烏丸御池遺跡	立会	江戸後期の包含層、江戸時代前期の包含層、江戸時代中期の包含層、江戸時代初期の包含層、平安時代中期～室町時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』文化市民局 2006年
57	左京三条四坊七町・烏丸御池遺跡	試掘	室町時代の土坑状遺構を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』1995年 文化観光局
58	左京三条四坊七町・烏丸御池遺跡	立会	鎌倉時代～江戸時代の土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局
59	左京三条四坊七町・烏丸御池遺跡	立会	江戸時代後期の包含層、鎌倉時代中期の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』文化市民局 2004年
60	左京三条四坊七町・烏丸御池遺跡	立会	室町時代の井戸を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 昭和63年度』文化観光局 1989年
61	左京三条四坊七町・烏丸御池遺跡	立会	近世以降の包含層、近世の包含層、江戸後期の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』文化市民局 2007年
62	左京三条四坊八町	立会	中世包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』文化市民局 2009年
63	左京三条四坊八町	立会	鎌倉時代の土坑、室町時代の土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』文化観光局 1990年
64	左京三条四坊八町	試掘	平安時代後期の土坑、鎌倉時代前期の土坑、鎌倉時代の井戸、鎌倉時代～室町時代の包含層、江戸時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 昭和59年度』文化観光局 1985年
65	左京三条四坊八町	立会	古墳時代初期の包含層、中世包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』文化市民局 1999年
66	左京三条四坊八町	立会	古墳時代の流れ塚積、鎌倉時代の土坑、室町時代前～中期の包含層、安土桃山時代～江戸時代初期の土坑、江戸時代後期～末期の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』文化市民局 2004年
67	左京三条四坊八町	試掘	近世の土坑、中世の土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』文化市民局 2004年
68	左京三条四坊八町・二条大路	立会	江戸時代の包含層、室町時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』文化観光局 1987年
69	左京三条四坊八町・二条大路	立会	江戸時代後期の包含層、時期不明の包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』文化観光局 1988年
70	左京三条四坊八町・二条大路	立会	室町時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』文化観光局 1988年
71	左京三条四坊八町・二条大路	立会	二条大路路面、平安時代後期～中世の落込、江戸時代初期の土坑を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』文化市民局 1999年
72	左京三条四坊八町・二条大路	立会	江戸時代末期の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』文化市民局 2007年
73	左京三条四坊九町	立会	江戸時代前期の包含層、桃山時代の包含層、鎌倉時代前期の包含層、平安時代末期のピット、平安時代後期の包含層、時期不明の落込を検出。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』文化市民局 2006年
74	左京三条四坊九町	試掘	室町時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』文化市民局 1995年
75	左京三条四坊九町	立会	近世遺構の包含層、江戸時代後期の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成19年度』文化市民局 2008年
76	左京三条四坊九町	立会	平安時代後期の包含層、鎌倉時代後期の包含層、江戸時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』文化観光局 1989年
77	左京三条四坊九町	立会	江戸時代中期～後期の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』文化市民局 2003年
78	左京三条四坊九町	立会	平安時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』文化市民局 1993年
79	左京三条四坊九町	立会	平安時代前期の土坑、平安時代後期～鎌倉時代の包含層、桃山時代～江戸時代初期の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』文化市民局 1998年
80	左京三条四坊九町・二条大路	立会	室町時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』文化観光局 1988年
81	左京三条四坊九町・二条大路	立会	江戸時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』文化市民局 2000年
82	左京三条四坊九町・二条大路	立会	江戸時代初期の落込を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成17年度』文化市民局 2006年

調査№	調査地点	調査法	調査成果概要	掲載文献
83	左京三条四坊十町・烏丸御池遺跡	発掘	陶器生産に関する遺物が多数出土。江戸時代の真鍮工房。	『平安京左京三条四坊十町跡』京都市埋蔵文化財発掘調査報告 2004-10 埋文研 2004 年
84	左京三条四坊十町・烏丸御池遺跡	発掘	古墳時代の遺物、平安時代～鎌倉時代の三条坊門小路の北側溝を抽出。	『昭和 54 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2012 年
85	左京三条四坊十町・烏丸御池遺跡	発掘	古墳時代の道路、杭跡、平安時代の井戸・土坑・柱穴、室町時代の溝・柱列・土坑、江戸時代前期の井戸・土坑・石組、江戸時代後期の井戸・室・土坑・柱穴を抽出。	『平安京左京三条四坊十町跡』京都市埋蔵文化財発掘調査報告 2004-4 埋文研 2004 年
86	左京三条四坊十町・烏丸御池遺跡	調査	平安～室町時代の宮小路路面・西側溝を抽出。平安時代後期の土坑群、室町時代の土坑、江戸時代の井戸・土坑・石組などを抽出	『平安京左京三条四坊十町・烏丸御池遺跡』古代文化調査会 2011 年
87	左京三条四坊十町・烏丸御池遺跡	立会	室町時代の包含層を抽出。	『京都市内遺跡発掘立会調査概報 昭和 62 年度』文化観光局 1988 年
88	左京三条四坊十町・烏丸御池遺跡	立会	室町時代中期の包含層、時期不明の包含層を抽出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 14 年度』文化市民局 2003 年
89	左京三条四坊十町・烏丸御池遺跡・宮小路	発掘	平安時代中期の柱穴群・土坑・宮小路西側溝、鎌倉時代～室町時代の井戸・土坑、安土桃山時代の井戸・土坑・石組遺構、築石遺構を抽出。	『平安京左京三条四坊十町跡・烏丸御池遺跡発掘調査報告書』株式会社文化財サービス 2020 年
90	左京三条四坊十一町・烏丸御池遺跡	発掘	室町時代後半の鍛冶工所跡とみられる遺構・鍛冶関連遺構を抽出。	『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1993 年
91	左京三条四坊十一町・烏丸御池遺跡	発掘	弥生時代～古墳時代の溝込、平安時代後期の御池、鎌倉時代の土坑・溝・井戸・柱穴群などを抽出。	『平安京左京三条四坊十一町・コスモシティ御池宮小路新築に伴う調査』古代文化調査会 2002 年
92	左京三条四坊十一町・烏丸御池遺跡・宮小路	試掘	近現代・江戸時代の包含層・土坑、江戸時代の包含層、室町時代の包含層、平安時代～室町時代の土坑を抽出。	『京都市内遺跡発掘立会調査報告 昭和 55 年度』文化観光局 1981 年
93	左京三条四坊十一町・烏丸御池遺跡・宮小路	立会	宮小路路面・西側溝を抽出。	『平成 7 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1997 年
94	左京三条四坊十一町・烏丸御池遺跡・宮小路	発掘	平安時代の宮小路路面・側溝群を抽出。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1994 年
95	左京三条四坊十四町	発掘	時期不明の土坑・井戸・溝込を抽出。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1994 年
96	左京三条四坊十四町	立会	室町時代の包含層、時期不明の縦状遺構を抽出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 26 年度』文化市民局 2015 年
97	左京三条四坊十五町	発掘	平安時代中期の池・溝・土坑、鎌倉時代の路面・溝・柱列、室町～安土桃山時代の溝・土坑・柱穴、江戸時代の井戸・礎石・柱穴・土坑などを抽出。	『平安京左京三条四坊十五町跡・亀原町・上白山町における埋蔵文化財発掘調査報告書』株式会社イビツタ 2018 年
98	左京三条四坊十五町	立会	平安時代の整地層、平安時代～室町時代の土坑、時期不明の柱列を抽出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 27 年度』文化市民局 2016 年
99	左京三条四坊十五町	立会	近世の包含層を抽出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 15 年度』京都市文化市民局 2004 年
100	左京三条四坊十五町	立会	近世の包含層、時期不明の包含層を抽出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 15 年度』文化市民局 2004 年
101	左京三条四坊十五町	立会	中世の土坑状遺構を抽出。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成 28 年度』文化市民局 2017 年
102	左京三条四坊十五町・烏丸御池遺跡・宮小路	発掘	平安時代の池跡・溝・土坑・柱穴、鎌倉～室町時代の土坑・井戸・築石遺構、桃山～江戸時代の建物基礎・井戸・石組・土坑などを抽出。	『平安京左京三条四坊十五町・烏丸御池遺跡跡地周辺の調査』古代文化調査会 2015 年
103	左京三条四坊十六町	立会	平安時代～鎌倉時代の土坑を抽出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 11 年度』文化市民局 2000 年

第三章 調査成果

1 基本層序 (図6・7)

基本層序は、現代整地層から地山まで含めて大きく7層に区分した。

- 第1層 駐車場の整備に伴う砕石による整地層である。層厚 0.1～0.2 mで調査区全域に分布する。
- 第2層 におい黄褐色泥砂による近現代整地層。層厚 0.3～0.4 mで調査区全域に分布する。炭化物、焼土、煉瓦片などを多量に含む。
- 第3層 大きく上下2層に細分されるが、何れも近代整地層であるため第3層としてまとめた。上位は黄灰色泥砂で層厚 0.3 m前後、下位は黄褐色砂泥と黒褐色砂泥の互層であり、何れも調査区全域に分布する。
- 第4層 オリーブ褐色・暗褐色・暗黄色砂泥による江戸時代後半整地層。層厚 0.1～0.2 mで調査区のほぼ全域に分布する。今回の調査では本層上面を第1-1面とし、江戸時代後半～幕末(18世紀後半～19世紀前半)の遺構を検出した。
- 第5層 暗黄色砂泥による江戸時代整地層。層厚 0.15 m前後。第1-2面検出遺構により大半が削り取られ、調査区北西部のみに残存する。江戸時代後半の遺物を包含する。本層上面を第1-2面とし、江戸時代後半(18世紀代)の遺構を検出した。
- 第6層 におい黄褐色砂泥による整地層。近世以降の大型土坑による大幅な削平を受け、調査区北壁の一部(図6 北壁断面36層)に残るのみである。第3面検出遺構である土坑54の上面を覆うように堆積していることから江戸時代初期頃の整地層と考えられる。本層上面を第2面とし、江戸時代初期の遺構を検出した。
- 第7層 黄褐色・灰色シルトによる地山層である。本層上面を第3面とし、室町時代後半～江戸時代初期の遺構を検出した。

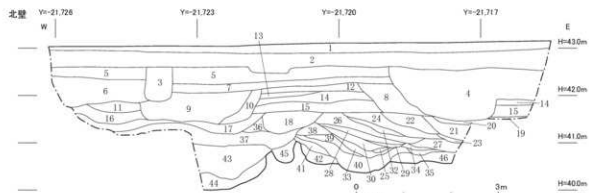
2 検出遺構

表2 遺構概要表

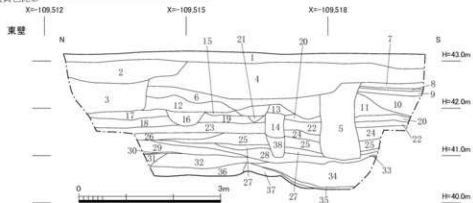
面	時代	遺構	備考
第1-1面	江戸時代後半～幕末	井戸、土坑	
第1-2面	江戸時代後半	溝、土坑、石室	
第2面	江戸時代初期	土坑	
第3面	室町時代後半～江戸時代初期	土坑	

(1) 第1面

第4層上面で江戸時代後半～幕末、第5層上面で江戸時代後半の遺構を検出した。以下に、第4層上面を第1-1面、第5層上面を第1-2面として遺構の記述を行う。



- | | |
|---|--|
| <p>1 2.5V8/2灰白色砂礫 【第1層】</p> <p>2 10VR4/3に多い黄褐色泥砂 炭化物・焼土・煉瓦片含む【第2層】</p> <p>3 10VR6/25灰黄色泥砂 瓦礫内埋土</p> <p>4 2.5VR4/2暗灰黄色泥砂 φ5~15cmの礫・焼土・煉瓦片・土管片など含む</p> <p>5 2.5V4/1黄灰色泥砂 【第3層】</p> <p>6 10VR5/25灰黄色泥砂 【製品1】</p> <p>7 2.5V4/3暗灰黄色泥砂 炭化物・焼土・煉瓦片含む</p> <p>8 10VR4/25灰黄色泥砂 φ10cm前後の礫・漆喰片など含む</p> <p>9 2.5V4/2暗灰黄色泥砂 φ8~15cmの礫・焼土・伊壁片・瓦など多く含む 【土坑33】</p> <p>10 2.5V5/2暗灰黄色泥砂</p> <p>11 10VR5/25灰黄色泥砂</p> <p>12 10VR3/3暗褐色泥砂 焼土多く含む 【第4層】</p> <p>13 2.5V4/3オリーブ褐色泥砂 φ5cm前後の小石多く含む 【第4層】</p> <p>14 2.5V4/2暗灰黄色泥砂 【第4層】</p> <p>15 10VR3/1黒褐色泥砂【製品1】</p> <p>16 2.5V4/3オリーブ褐色泥砂 【第5層】</p> <p>17 2.5V2/1黒色泥砂 【土坑35】</p> <p>18 2.5V3/1黒褐色泥砂 木片・炭化物多く含む 【土坑42】</p> <p>19 2.5V4/2暗灰黄色泥砂</p> <p>20 2.5V5/2暗灰黄色泥砂φ10cm前後の礫</p> <p>21 2.5V2/1黒色泥砂 木片多く含む</p> <p>22 2.5V3/1黒褐色泥砂 木片多く含む</p> <p>23 2.5V5/2暗灰黄色泥砂</p> | <p>24 2.5V3/2黒褐色泥砂 木片・炭化物含む</p> <p>25 2.5V5/2暗灰黄色泥砂</p> <p>26 2.5V3/1黒褐色泥砂 木片・炭化物多く含む</p> <p>27 2.5V4/1黄灰色泥砂 7.5V6/1灰色シルト含む</p> <p>28 2.5V3/1黒褐色泥砂 木片・炭化物多く含む</p> <p>29 2.5V4/1黄灰色泥砂 木片含む</p> <p>30 2.5V3/1黒褐色泥砂 木片・炭化物多く含む</p> <p>31 2.5V3/2黒褐色泥砂 木片・炭化物含む</p> <p>32 2.5V6/1黄灰色泥砂</p> <p>33 2.5V2/1黒色泥砂 木片・炭化物多く含む</p> <p>34 2.5V3/2黒褐色泥砂 7.5V6/1灰色シルト含む</p> <p>35 5V3/2オリーブ黒色砂泥</p> <p>36 2.5V7/2灰黄色細砂 φ5~10cmの小石 【土坑46】</p> <p>37 2.5V4/3オリーブ褐色泥砂</p> <p>38 10VR3/3に多い黄褐色泥砂 2.5V5/4黄褐色シルト含む【第6層】</p> <p>39 10VR5/25灰黄色泥砂泥</p> <p>40 2.5V4/2暗灰黄色泥砂 7.5V6/1灰色シルト 【土坑54】</p> <p>41 2.5V4/1黄灰色泥砂 7.5V6/1灰色シルト含む</p> <p>42 2.5V3/1黒褐色泥砂 7.5V6/1灰色シルト多く含む 【土坑55】</p> <p>43 2.5V3/2黒褐色泥砂 7.5V6/1灰色シルト多く含む 【土坑58】</p> <p>44 7.5V6/1灰色シルト 2.5V3/2黒褐色泥砂多く含む</p> <p>45 2.5V3/2黒褐色泥砂 7.5V6/1灰色シルト少量含む 【土坑56】</p> <p>46 7.5V6/1灰色シルト 2.5V3/1黒褐色泥砂含む 【土坑52】</p> |
|---|--|



- | | |
|---|---|
| <p>1 2.5V8/2灰白色砂礫 【第1層】</p> <p>2 10VR4/3に多い黄褐色泥砂 炭化物・焼土・煉瓦片含む 【第2層】</p> <p>3 2.5V4/2暗灰黄色泥砂 φ5~15cmの礫・焼土・煉瓦片・土管等含む</p> <p>4 10VR3/2黒褐色泥砂 炭化物・焼土・煉瓦片多く含む</p> <p>5 2.5V7/3灰黄色砂礫</p> <p>6 10VR4/25灰黄色泥砂 炭化物・焼土・煉瓦片含む</p> <p>7 2.5V6/2灰黄色泥砂 φ5cm前後の小石 【第3層】</p> <p>8 2.5V5/25灰黄色泥砂</p> <p>9 2.5V4/3オリーブ褐色泥砂</p> <p>10 5V2/1黒色泥砂 φ5~10cmの礫含む</p> <p>11 2.5V7/4灰黄色砂礫</p> <p>12 2.5V3/2黒褐色泥砂</p> <p>13 2.5V6/3に多い黄褐色泥砂 φ3~5cmの小石含む 【第3層】</p> <p>14 2.5V3/1黒褐色泥砂</p> <p>15 2.5V3/2暗灰黄色泥砂</p> <p>16 2.5V3/2黒褐色泥砂</p> <p>17 2.5V4/2暗灰黄色泥砂 【土坑29】</p> <p>18 10VR3/1黒褐色泥砂</p> <p>19 2.5V3/1黒褐色泥砂</p> <p>20 2.5V2/1黒色泥砂</p> | <p>21 2.5V4/2暗灰黄色泥砂</p> <p>22 2.5V3/2黒褐色泥砂</p> <p>23 2.5V4/2暗灰黄色泥砂</p> <p>24 2.5V3/1黒褐色泥砂</p> <p>25 2.5V3/2黒褐色泥砂 木片多量に含む</p> <p>26 2.5V5/2暗灰黄色泥砂 φ10cm前後の礫</p> <p>27 2.5V4/2暗灰黄色泥砂</p> <p>28 2.5V3/2黒褐色泥砂 木片多量に含む</p> <p>29 2.5V2/1黒色泥砂 木片多量に含む+2.5V4/2暗灰黄色泥砂含む</p> <p>30 2.5V5/2暗灰黄色泥砂</p> <p>31 2.5V4/1黄灰色泥砂 7.5V6/1灰色シルト含む</p> <p>32 2.5V3/1黒褐色泥砂</p> <p>33 2.5V3/1黒褐色泥砂</p> <p>34 2.5V2/1黒色シルト 粘性強い</p> <p>35 2.5V3/1黒褐色シルト 7.5V6/1灰色シルト 【土坑50】</p> <p>36 7.5V6/1灰色シルト 2.5V3/1黒褐色泥砂含む 【土坑52】</p> <p>37 2.5V4/1黄灰色シルト 7.5V6/1灰色シルト塊多く含む 【土坑50】</p> <p>38 2.5V4/3オリーブ褐色泥砂 【製品1】</p> |
|---|---|

図6 調査区土層断面図1 (1:80)

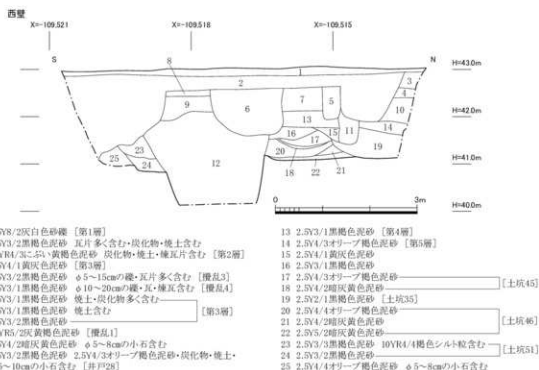
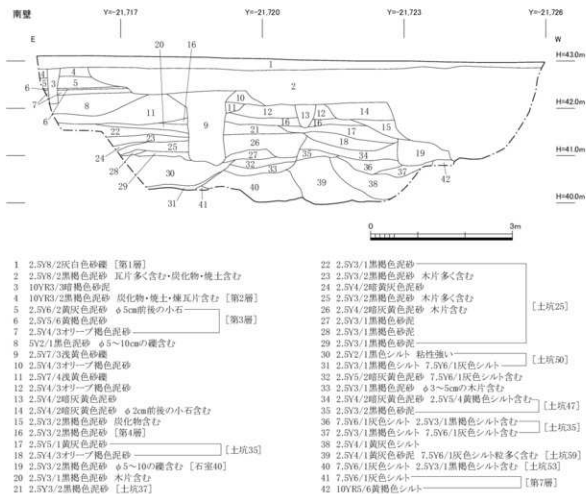


図7 調査区土層断面図2 (1:80)

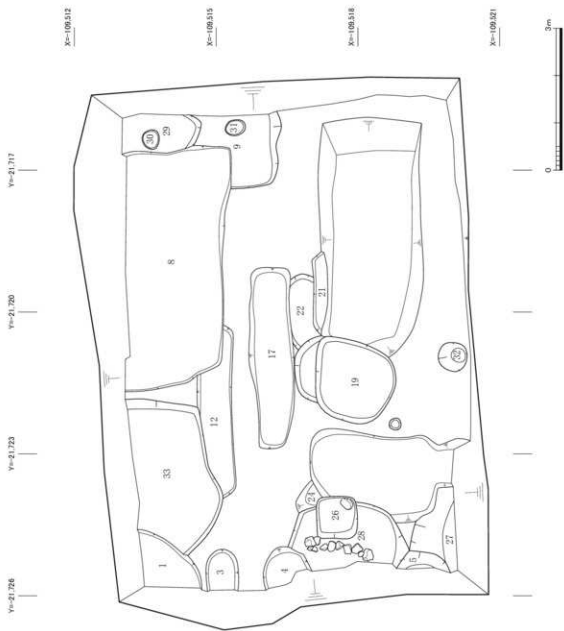


图8 第1-1面平面图(1:80)

第1-1面(図8)

第1-1面では江戸時代後半～幕末に属する井戸、土坑、ピットを検出した。

[井戸]

井戸28

B1・C1区で検出した井戸である。東側の大半が調査区外に位置するため規模は不明である。埋土の上位で石を数個検出したが、井戸枠自体は検出されなかった。検出面から約1.9m掘り下げたが底面は検出していない。安全面を考慮し、完掘は断念した。埋土は炭化物を含む暗灰黄色泥砂である。遺物は13B～14A段階の土師器とともに、施釉陶器、染付、瓦片などが出土した。

井戸19

C2区で検出した不正円形の井戸である。検出当初は円形土坑の可能性を考えたが、地山のシルト層を深く掘り下げていることから、井戸であると判断した。井戸枠は検出していない。径6.5～6.9m、検出面からの深さは2.28mを測る。埋土は暗灰黄色泥砂、オリーブ褐色砂泥、灰黄褐色泥砂で、炭化物を含む。遺物は13B～14A段階の土師器とともに、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦片などが出土した。

[土坑]

土坑33

A1・2区で検出した土坑である。平面形は不正円形を呈し、土坑の北側は調査区外に延びる。底面はやや凹凸があり、断面形は箱型を呈する。東西幅3.45m、検出面からの深さ0.67mを測る。埋土は暗灰黄色泥砂で、炭化物・焼土を多く含む。遺物は13B段階に属する土師器とともに、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦、土製品、鉾滓(銅か)が出土した。埴塼、埴壁などの焼造関連の遺物が多く出土している。

土坑26

B1区で検出した土坑である。井戸28を切る。平面形は方形を呈し、長軸0.88m、短軸0.82mを測る。肩口からほぼ垂直に掘り下げられ、検出面からの深さは0.61mを測る。

[ピット]

調査区北東で柱穴30・31を検出した。径0.35m前後で検出面からの深さは0.15m程度である。柱間は1.8mを測るが、他に柱穴が検出されておらず柵・建物の一部であるかは不明である。

第1-2面(図9)

江戸時代後半に属する溝、石室、土坑を検出した。土坑は調査区西半に多く位置する。

[溝]

溝41

B1～B4区で検出した東西溝である。検出長9.1m、幅0.5m、検出面からの深さ0.48mを測る。溝の東半では底面に1.2m間隔で礎石の可能性がある石が3石残り、布掘りの礎石列であった可能性もある。埋土はオリーブ褐色泥砂である。遺物は施釉陶器、染付が少量出土しているが、小片

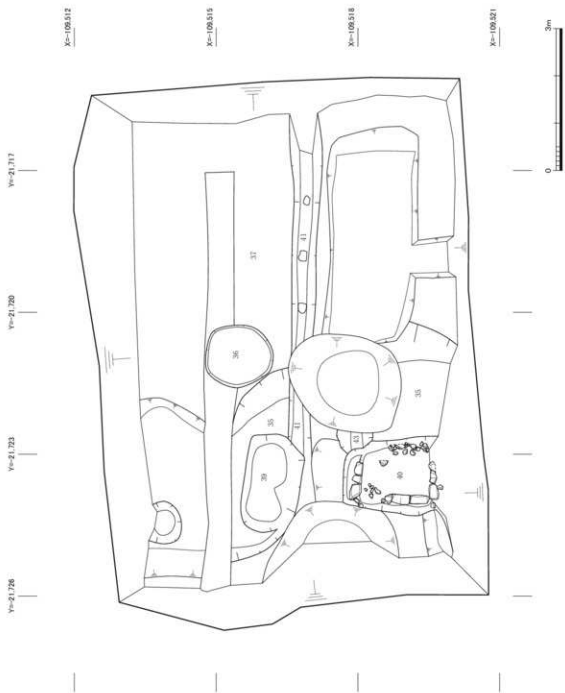
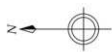


图9 第1—2面平面图 (1:80)

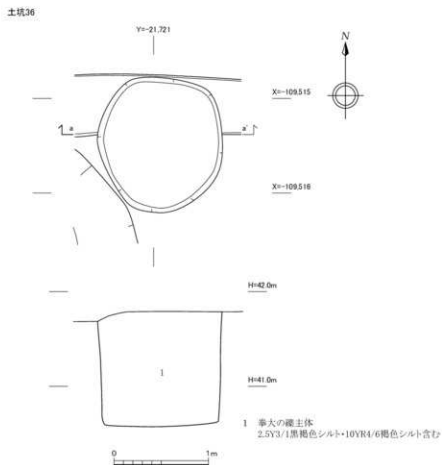
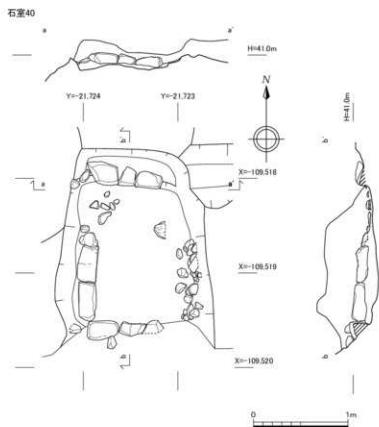


図10 石室40平面立面図、土坑36平面断面図（1：40）

のものが多く時期の詳細は判断しにくい。溝 41 の本調査地東隣への延長位置は現建物の敷地境界とはほぼ一致していることから、江戸時代後半の区画が現在まで踏襲されているものと考えられる。

[石室]

石室 40 (図 10)

C 2 区で検出した石室である。南側の掘方は調査区外に位置し、検出長 2.1 m、幅 1.5 m を測る。花崗岩の石材を方形に組むが、東面全体及び西面北半部の石材は抜き取られており、他面も基底の 1 段のみ残存する。石室内面の長軸（南北方向）は 1.44 m を測る。石室内埋土は黒褐色砂泥で拳大の礫、炭化物、木片を含む。遺物は 12 B～13 A 段階の土師器とともに施釉陶器、焼締陶器などが出土している。

[土坑]

土坑 36 (図 10)

B 2 区で検出した土坑である。平面形はやや歪な円形を呈し、長軸 1.42 m、短軸 1.33 m を測る。肩口からはほぼ垂直に掘り下げられ、底面は平坦である。検出面からの深さは 1.22 m を測る。拳大の礫により埋め戻され、礫間の隙間に黒褐色・褐色シルトが少量流入する。検出段階では井戸の可能性を考えたが、シルト層を掘り抜かず湧水面まで到達していない可能性が高く、土坑として扱った。水溜や桶などの掘付跡の可能性も考えられるが、遺構壁面や底面に木枠などの痕跡は残っておらず詳細は不明である。遺物の出土は無く、詳細な時期も不明である。

土坑 35

調査区西半の大部分を占める大型の土坑である。調査区の中程で東肩ラインを検出したが、他面は調査区外に位置するため規模や平面形は不明である。検出面からの深さは最も深い箇所 0.52 m を測る。肩口から傾斜をつけて掘り下げられ、底面はやや丸みを帯びる。埋土は黄灰色・オリブ褐色泥砂である。12 B 段階と考えられる土師器とともに、施釉陶器、染付、瓦などが出土した。

[その他の遺構]

整地 37

調査区東半に分布する黒褐色泥砂による整地層である。層厚 0.15～0.25 m。検出段階では江戸時代後半の遺物を含む土坑として考えていたが、掘削後の底面がほぼ平坦で掘り下げられた痕跡が確認できないことや、第 1～2 面で検出した他の遺構が全て本遺構を切り込んでいることなどから江戸時代後半の整地層（第 5 層の一部）である可能性が高いと考える。

第 2 面 (図 11)

第 2 面では、江戸時代初期に属する土坑を検出した。

[土坑]

土坑 42

B 2 区で検出した土坑である。平面形は南北に長い楕円形を呈し、北肩は調査区外に位置する。検出長 1.71 m、幅 1.07 m、検出面からの深さは 0.47 m を測る。埋土は炭化物や木片を多く含む黒

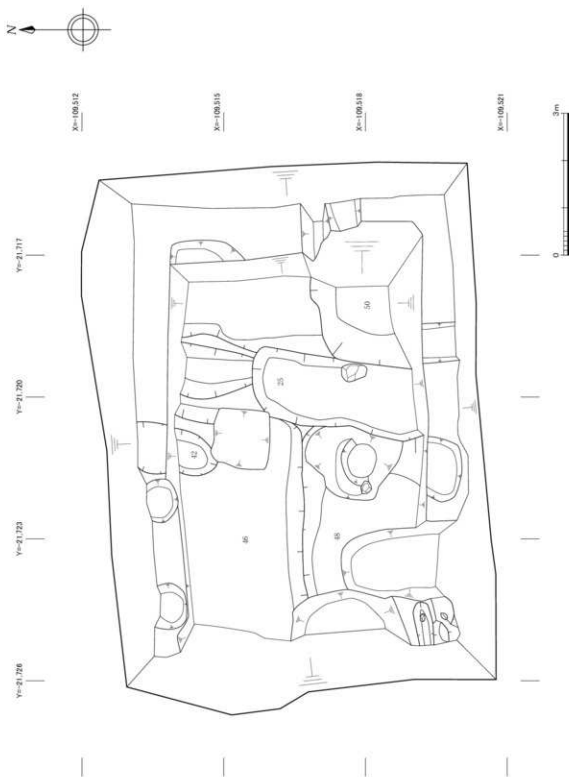


图11 第2面平面图 (1 : 80)

褐色泥砂である。遺物は11 B段階の土師器とともに、施軸陶器、焼締陶器、木製品などが出土した。木製品には荷札と思われる木簡2枚を含む。

土坑 25

調査区東半を占める大型の土坑である。土坑の北・南・東肩は調査区外に位置するが、調査区の中央付近に位置する土坑の西肩ラインは南北方向に直線的に延びることから、平面方形を呈する土坑の可能性を考える。土器・陶磁器類、木製品、獣骨などが多く出土することから廃棄土坑と考えられる。埋土は黒色泥砂、土器・陶磁器類や木片を多く含む暗褐色泥砂、黄灰色細砂などが層状に堆積する。調査区南北壁面では層状の堆積が西から東に傾斜する状況が確認でき、間の町通に面する町屋から廃棄物が投棄されたものと考えられる。

土坑 46

調査区北西部を占める土坑である。土坑25に東側を切られ、土坑48の北側を切る。土坑の北・西肩は、調査区外に位置する。検出面からの深さは0.61 mを測り、底面はやや丸みを持つ。埋土は灰黄色細砂、オリブ褐色砂泥である。遺物は11 A～B段階の土師器とともに、施軸陶器、焼締陶器、木製品などが出土した。

土坑 48

調査区南西部を占める土坑である。土坑25に東側、土坑46に北側を切られる。土坑の南・西肩は、調査区外に位置する。検出面からの深さは0.47 mを測り、底面はやや丸みを持つ。埋土は暗灰黄色泥砂で、炭化物を含む。遺物は11 A～B段階の土師器とともに、施軸陶器、焼締陶器などが出土した。

土坑 50

C4区で検出した土坑25の下位に位置する土坑である。平面方形を呈し、東・南肩は調査区外に位置する。検出面からの深さは0.53 mを測る。埋土は黒褐色砂泥で粘性が強い。遺物は11 A段階に属する土師器とともに、施軸陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、木製品、獣骨などが出土した。

(3) 第3面 (図12)

第2面で検出した江戸時代初期の遺構を完掘後に検出した遺構群を第3面として扱った。検出遺構は土坑のみで、複数が切り合う状況である。いずれも地山を深く掘り込んでいることから土取穴と想定される。

平面形は不正円形、不正方形を呈するものが大半であるが、土坑56は南北方向の溝状を呈する。埋土は土坑57が黒色シルト、その他が地山が混入する黒褐色シルトである。土坑57は土坑50と埋土や出土遺物の時期が類似することから、2-2面の遺構であった可能性がある。その他は土坑59・61から室町時代の瓦、土坑52から11 A段階の土師器と施軸陶器・焼締陶器などが出土していることから、室町時代～江戸時代初期にかけての土取穴群の可能性が考えられる。

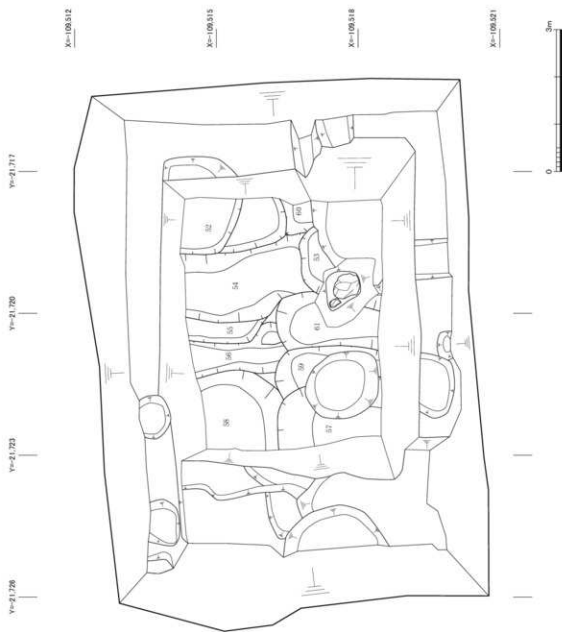
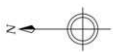


图12 第3面平面图 (1 : 80)

3 出土遺物

遺物はコンテナ 37 箱分出土した。出土遺物のほぼ全体が江戸時代に属するものであり、中世以前に属する遺物は数点のみである。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク点数	C ランク箱数
平安時代	緑釉陶器		緑釉陶器 1 点		
室町時代	丸瓦、平瓦				
江戸時代初期	土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付（輸入）、土製品、木製品、染付、獣骨		土師器 20 点、施釉陶器 33 点、施釉陶器素地 1 点、焼締陶器 8 点、染付（輸入）5 点、道具瓦 1 点、窯道具 1 点、土製品 3 点、木製品 9 点、		
江戸時代後半	土師器、須恵器、焼締陶器、瓦貫土器、土製品、銭貨、石製品、木製品		土師器 5 点、施釉陶器 10 点、土師質土器 2 点、染付 10 点、焼締陶器 1 点、軒棧瓦 1 点、土製品 3 点、石製品 3 点		
合計		43 箱	117 点（6 箱）	0 点	37 箱

*コンテナ箱数は、整理段階で 6 箱増加した。

(1) 土器・陶磁器類

平安時代 (図 13)

1 は緑釉陶器底部片である。貼付高台か。高台端部は削られ残存していない。底部内面に 1 条の沈線が巡る。全面に淡緑色の釉薬が施される。土坑 16 より出土。

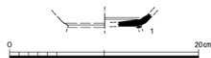


図 13 出土遺物実測図 1 (1 : 4)

江戸時代

土坑 50 (図 14 2~15)

2~7 は土師器である。2 は所謂つぼ。口径 2.2 cm、器高 2.5 cm。手づくねで成形され、胎土は精良で灰黄色を呈する。3 は皿 N。口径 5.0 cm、器高 1.1 cm。手づくねで成形され、口縁部及び底部内面をナデで調整する。胎土は精良で灰白色を呈する。4 は皿 S b。口径 9.9 cm、器高 2.1 cm。口縁部は緩く立ち上がり、端部は外上方に丸くおさめる。胎土は精良でにぶい黄橙色を呈する。5~7 は皿 S。法量は 5 が口径 11.0 cm、器高 2.3 cm、6 が口径 11.9 cm、器高 2.1 cm、7 が口径 11.9 cm、器高 2.1 cm。口縁部はやや屈曲気味に外上方に立ち上がり、内面がナデにより僅かに凹む。底部内面に 1 条の沈線が巡る。

8~13 は施釉陶器である。8 は唐津向付。口縁部に推定 3 箇所の輪花施す。口縁部は外上方に立ち上がり、内面に段が付く。内面及び口縁部外面上位に灰オリープ色を呈する長石釉系の釉薬を施す。底部内面に 3 箇所の目跡が残る。9~13 は瀬戸美濃系。9 は瀬戸灰軸皿。口径 7.8 cm、器高 1.7 cm、高台径 4.8 cm。削り出し高台。浅黄色の釉薬を内面及び口縁部外面に施す。底部内外面にトチン跡が残る。10 は長石釉丸碗。口径 10.4 cm、器高 6.1 cm、高台径 4.6 cm。幅広の低い高

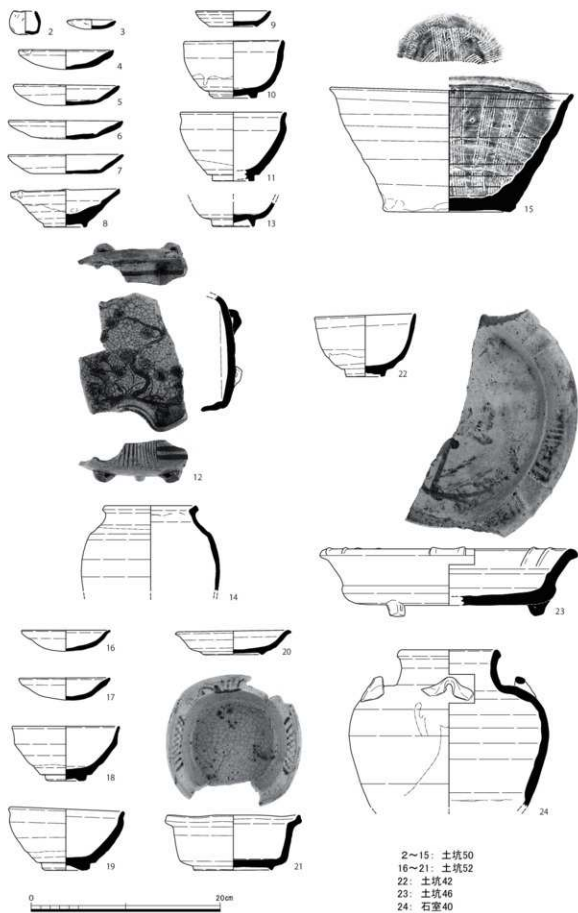


图14 出土文物实测图2 (1:4)

台を削り出す。口縁部は上方に立ち上がり、端部はナデによりやや薄くなる。内面及び体部外面上半に長石釉を施す。11は天目茶碗。黑色を呈する鉄釉を内面及び体部外面に施す。12は織部向付。器高4.4cm。底部外面に半環状の脚を3足貼り付ける。内面に松、体部外面に縦横の直線を鉄絵で描く。

13・14は輸入陶器。13は陶胎染付の底部。高台径4.1cm。内面及び体部外面、高台外面には白色を呈する釉薬を施す。底部内外面に呉須により1条の圏線を描く。14は鉄軸壺。口径9.6cm。口縁部は外反し、端部は面を持つ。口縁部内外面及び頸部外面にふい黄色を呈する鉄釉を施す。胎土は鉄分を含みにふい橙色を呈し、焼き締まる。

15は焼締陶器で信楽揃鉢。口径25.5cm、器高13.2cm、底径13.0cm。体部内面に6条単位、底部内面に6条単位の斜格子状の摺り目を施す。体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はナデにより凹み稜を持つ。内面は使用により平滑である。

これらの遺物は、11A～B段階に属する。

土坑52(図14 16～21)

16・17は土師器皿Sb。法量は、16が口径9.2cm、器高2.3cm。17が口径9.6cm、器高2.4cm。口縁部は緩く立ち上がり、端部はナデにより外反する。胎土はいずれも精良で明褐色を呈する。

18～21は瀬戸美濃産の施釉陶器。18・19は天目茶碗。いずれも鉄釉が施され、18は極暗褐色、19は暗赤褐色を呈する。18は口径11.2cm、器高5.8cm、高台径4.2cm。断面逆台形の低い高台を削り出す。口縁部のくびれは少なくともほぼ上方に立ち上がる。19は口径11.9cm、器高6.6cm、高台径5.0cm。全体的に器壁が厚く、釉薬も厚い。高台内面は深く削り込む。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く屈曲しくびれを作る。20は志野長石釉丸皿。口径11.5cm、器高2.6cm、高台径6.2cm。全面に灰白色を呈する長石釉を厚く施す。低い高台を削り出す。体部は丸みを持って外上方に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。底部外面に3箇所のピン痕が残る。21は志野向付。口径13.8cm、器高5.8cm、高台径8.3cm。低い高台を削り出す。四方の向付で、口縁部が外反し、端部は上方に突出する。口縁部内面に鉄絵で緑文様を描き、全面に灰白色を呈する長石釉を施す。

これらの遺物は、11A～B段階に属する。

土坑42(図14 22)

22は瀬戸美濃系の銅緑釉碗。口径10.5cm、器高6.6cm、高台径4.1cm。低い角高台を削り出す。底部はほぼ平坦で、体部は丸みを持ち上方に向けた後直線的に口縁部まで立ち上がり、端部は上方で丸くおさめる。内面及び体部外面上位まで灰オリーブ色を呈する釉薬を施す。

土坑46(図14 23)

23は志野大皿。口径25.8cm、器高7.3cm。底部外面に半環状の脚が1箇所残存する。見込みに月・樹木(風水か)、口縁部内面に直線で区画された中に抽象文を鉄絵で描く。全面に灰白色を呈する長石釉を施す。

石室 40 (図 14 24)

24 は焼締陶器四耳壺。口径 9.9 cm。肩部は丸みを持ち頸部は屈曲気味に上方に立ち上がる。口縁端部は外方に肥厚する。肩部から体部上位と口縁部内面に自然釉が掛かる。

土坑 25 (図 15 25～64、図 16 65～70)

25～35 は土師器。25 は所謂つぼつぼ。口径 2.2 cm、器高 2.6 cm。胎土は精良で灰黄色を呈する。26・27 は皿 N。法量は 26 が口径 6.0 cm、器高 1.4 cm、27 が口径 6.5 cm、器高 1.3 cm。いずれも胎土は精良で、26 は灰白色、27 はにぶい橙色を呈する。28 は皿 S b。口径 9.8 cm、器高 2.5 cm。底部は丸みを持ち、口縁部は丸みを持って立ち上がり、端部は丸くおさめる。胎土は精良で、にぶい橙色を呈する。29～34 は皿 S。口径 10.7～11.4 cm、器高 2.0～2.4 cm。底部はほぼ平坦で、口縁部はやや屈曲気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。29 は口縁部がナデにより外反する。底部内面にナデによる圏線が巡る。29・32・33 は口縁部に油煙が付着し、燈明皿として用いられたと考えられる。また、30 は全体に煤が付着し、火事などによる 2 次的な焼成を受けたものと考えられる。35 は焙烙鍋。口径 27.7 cm。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反し、端部は上方に突出する。口縁の屈曲部に成形時の指頭痕が残る。外面には使用による煤が付着する。

36 は焼塩壺蓋。口径 6.8 cm、器高 2.2 cm。天井部外面は指頭痕が残る、内面は布目痕が残る。

37・38 は焼塩壺。法量は、37 が口径 5.0 cm、器高 9.0 cm、38 が口径 4.8 cm、器高 8.4 cm。いずれも底部から体部下半は布を被せた型に押し付け成形し、その上位に粘土紐を積み上げている。底部外面から体部は不定方向のナデ、口縁部は横方向のナデで調整する。

39～42 は染付。いずれも輸入品と考えられる。39 は小型の椀。口径 11.3 cm。器壁は薄く体部外面に鳳凰と思われる鳥が呉須で描かれる。40 は椀底部。高台径 4.5 cm。底部内外面に呉須による圏線が描かれる。釉薬は白味がかり、高台外面の一部が露胎である。41 は椀体部から口縁部。口径 17.6 cm。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。体部外面に草花文、口縁屈曲部内面に 1 条の圏線、口縁部内面に波状の線が呉須により描かれる。42 は大皿底部。高台径 12.6 cm。見込みに草花文を描く。

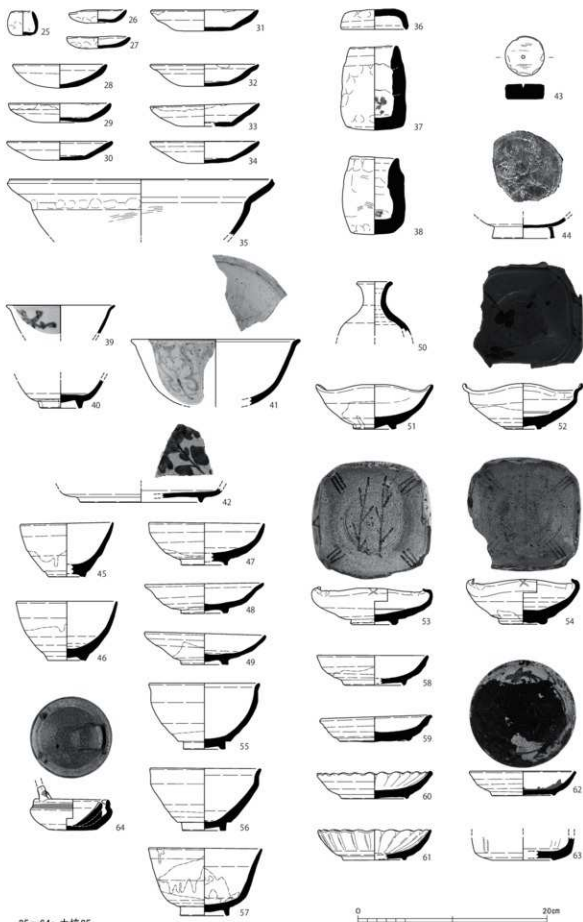
43 は不明品。瓦質土器の一部を円盤状に削り出したしたものと考えられる。直径 4.2 cm、厚さ 1.6 cm。片面の中心付近に径 3 mm の孔を穿つ。

44 は施釉陶器素地と考えられる。底部片である。高台径 6.6 cm。貼付高台で高台端部はナデによりやや凹む。見込みに梅と思われる枝にとまる鳥が印刻される。素地の状態で使用されたものか未成品として廃棄されたものかは不明。

45～54 は唐津。45・46 は灰釉椀。45 は口径 9.7 cm、器高 5.8 cm、高台径 3.9 cm。体部は僅かに内湾して立ち上がり、口縁部は尖り気味に丸くおさめる。内面及び体部上半に暗オリーブ色を呈する灰釉を施す。46 は口径 10.5 cm、器高 6.3 cm、高台径 4.1 cm。体部は内湾して立ち上がり口縁部は尖り気味に丸くおさめる。内面及び体部上半に灰オリーブ色を呈する灰釉を施す。47 は灰釉深皿。口径 12.0 cm、器高 4.4 cm、高台径 5.0 cm。体部は丸みを持って上方に立ち上がり、口縁部は外反気味に丸くおさめる。内面及び口縁部から体部外面に灰釉を施す。48・49 は灰釉皿。48 は口径

124 cm、器高 3.2 cm、高台径 5.0 cm。体部は屈曲気味に立ち上がり、口縁部は外反する。高台部を除き灰オリーブ色を呈する灰軸を施す。49 は口径 12.7 cm、器高 3.3 cm、高台径 4.8 cm。体部から口縁部は丸みをもって内湾気味に外上方に立ち上がる。内面及び体部外面上位に黄褐色を呈する灰軸を施す。50 は薫灰軸徳利。口径 3.3 cm。頸部は外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。外面及び口縁部内面に灰白色を呈する薫灰軸を施す。51 ～ 54 は向付。いずれもロクロ成形の後、口縁を内側に折り曲げ四方向付とする。胎土はいずれも鉄分が多く赤色を呈する。51 は口径 12.2 cm、最大器高 4.8 cm、高台径 4.4 cm。体部から口縁部が外上方に緩やかに立ち上がり、端部は上方で丸くおさめる。内面及び口縁部外面に灰褐色を呈する鉄軸を施す。見込みに 3 箇所が目跡が残る。52 は復元口径 12.4 cm、器高 4.9 cm、高台径 3.8 cm。体部は外上方に立ち上がり、口縁部は屈曲し、端部は上方で丸くおさめる。底部内面と体部内面の境は段が付く。見込みに草花文を鉄絵で描く。内面及び口縁部外面に褐灰色を呈する長石軸を施す。53 は口径 11.1 cm、器高 3.9 cm、高台径 3.8 cm。体部は外上方に低く立ち上がり、口縁部を屈曲気味に内に折り曲げ、端部は内上方で丸くおさめる。見込みに草文と 3 本単位の線、口縁部外面に「×」状の線を鉄絵で描く。内面及び体部外面に灰白色を呈する長石軸を施す。54 は口径 10.5 cm、器高 4.8 cm、高台径 4.7 cm。体部はやや丸みを持って外上方に立ち上がり、口縁部は内側に折り曲げ、端部は内上方に丸くおさめる。見込み及び口縁部外面に 53 と同様の草文などを鉄絵で描く。内面及び体部外面に灰白色を呈する長石軸を施す。

55 ～ 64 は瀬戸美濃系陶器。55・56 は天目茶碗。いずれも口縁部は上方に立ち上がり端部が外反する。55 は口径 11.5 cm、器高 7.0 cm、高台径 4.5 cm。体部は丸みを持って立ち上がる。内面及び体部外面に黒色を呈する鉄軸を施す。56 は口径 11.5 cm、器高 6.6 cm、高台径 4.6 cm。内面及び体部外面に黒褐色を呈する鉄軸を施す。57 は碗。口径 11.8 cm、器高 7.1 cm、高台径 5.3 cm。底部から体部はやや屈曲気味に折れて外上方に立ち上がり、口縁部端部は尖り気味に丸くおさめる。内面及び体部外面に鉄軸を施し、一部に灰軸を重ねて施す。58・59・62 は丸皿。58 は口径 11.6 cm、器高 3.2 cm、高台径 6.1 cm。内面に菊花文の印花がある。内面及び口縁部外面に灰緑色を呈する銅緑軸を施す。59 は口径 11.5 cm、器高 2.8 cm、高台径 7.1 cm。全体的に器壁が厚い。底部外面に重ね焼き時のビン痕が 3 箇所残る。全面に灰白色を呈する長石軸を施す。62 は口径 11.0 cm、器高 2.6 cm、高台径 6.6 cm。内面の大部分に漆が付着することから、溶いた漆を入れる容器として用いられたと考えられる。内面には蔓文が鉄絵で描かれる。全面に淡黄色を呈する長石軸が施される。60・61 は菊皿。60 は口径 11.9 cm、器高 2.9 cm、高台径 6.8 cm。61 は口径 11.8 cm、器高 3.3 cm、高台径 6.7 cm。いずれも全面に灰白色を呈する長石軸を施す。63 は志野四方向付底部。四隅外面は鑲を付け、底部は外面を削り込み碁笥底とする。全面に灰白色を呈する長石軸を施す。64 は志野灯明具。口径 7.5 cm、器高 4.7 cm、底径 5.1 cm。内面に灯芯台を接着土を用いて貼り付ける。底部は平坦で、体部は外上方に立ち上がる。口縁部は屈曲して立ち上がり、端部は内側に折り曲げるが、灯芯台を貼り付けた箇所は折り曲げた端部を切り欠く。灯芯台の反対側には半環状の把手が張り付けられていたと思われるが、把手の上位を欠く。口縁部外面及び把手付根に鉄絵で線を描く。全面に灰白色を呈する長石軸を施す。



25~64: 土坑25

图15 出土物実測図3 (1:4)

65は匣鉢。口径14.0cm、器高8.5cm、底径14.3cm。口縁端部に打痕のような跡があり、火入れとして転用された可能性がある。胎土は赤褐色を呈し、焼成はややあまい。

66～70は焼締陶器。66は備前小壺。頸部から上位は欠損する。底径5.0cm。底部はヘラ切りである。胎土は硬く焼き締まり、灰赤色を呈する。67・68は伊賀水差。いずれも歪が大きな個体である。直接接合せず別個体として扱っているが、同一個体である可能性もある。67は口縁部から体部片。口縁部は内側に強く折り曲げる。広範囲に自然軸が掛かる。68は体部から底部片。体部下方に凹線状の窪みが1条巡る。体部内面にジグザグと短い線のヘラ書きがある。69・70は播鉢。69は丹波播鉢。口縁部残存が1/8以下であるため口径は復元していない。1条単位の摺目を体部内面に施す。70は備前播鉢。口径23.4cm、器高11.5cm、底径10.7cm。口縁部は上下に拡張し外面に2条の凹線が巡る。体部内面に9条単位の摺目を放射状に施し、底部内面は「×」状に摺目を施す。胎土は硬く焼き締まり、褐色を呈する。

これらの遺物は11B段階に属する。

土坑33 (図16 71～86、図17 87～98)

71～75は土師器。71は皿N。口径5.3cm、器高1.5cm。胎土はにぶい橙色を呈する。72・73は皿Sb。法量は72が口径7.6cm、器高1.8cm、73が口径8.4cm、器高1.8cm。底部はやや丸みを持ち、口縁部は72は僅かに外反し、73は直線的に外上方に立ち上がる。いずれも口縁部の一部に油煙が付着し、燈明皿として使用された可能性がある。胎土は精良で、72は浅黄橙色、73はにぶい橙色を呈する。74・75は皿S。法量は74が口径9.7cm、器高1.9cm、75が口径10.1cm、器高1.9cm。底部は丸みを持ち、口縁部は外反する。底部内面に工具による圏線が巡る。いずれも口縁部に油煙が付着し、燈明皿として使用された可能性がある。胎土は精良で、灰白色を呈する。

76～84・98は施軸陶器。76は蓋。土瓶の蓋か。77～79は丸椀。背の低い輪高台を削り出す。体部は丸みを持ち、口縁部は上方に立ち上がる。77は口径9.4cm、器高5.3cm、高台径3.3cm。口縁部から体部外面に草花文を色絵で描く。内面及び体部外面に灰軸を施し、高台から底部外面は露胎である。78は口径11.0cm、器高6.8cm、高台径5.5cm。口縁部から体部外面に鉄絵で幅広の線を3条巡らす。内面及び体部外面に灰軸を施し、高台から体部外面は露胎である。79は口径10.6cm、器高6.5cm、高台径5.2cm。内面及び体部外面に灰軸を施し、高台及び底部外面は露胎である。80～82は筒形椀。80は口径9.6cm、器高5.9cm、高台径5.7cm。底部から体部の立ち上がりは稜を持つ。外面に鉄絵で幅1.0cm前後の刷毛による線を3条描く。81は口径8.8cm、器高6.6cm、高台径6.2cm。底部から体部の立ち上がりは稜を持ち、体部下方は竹の節のように肥厚する。外面の上位に鉄絵による笹文を描き、下位は鉄絵を塗る。82は口径12.2cm、器高9.2cm、高台径6.5cm。底部から体部の立ち上がりは丸みを持つ。口縁端部は内側に肥厚する。体部上方に貼花がある。外面に鉄絵による山水画を描く。83は輪花鉢。8輪花か。口径18.2cm、器高7.0cm、高台径10.0cm。背が低く幅の広い高台を削り出す。見込みに白色の釉薬、口縁部内面及び体部外面に灰軸を施し、見込みに鉄絵と呉須により笹文を描く。底部外面に「上代」の墨書がある。84は土瓶。全体に錆軸を施し、一部に灰軸を流し掛ける。口縁部外面に節書きによる糸目、体部外面にヘラによる

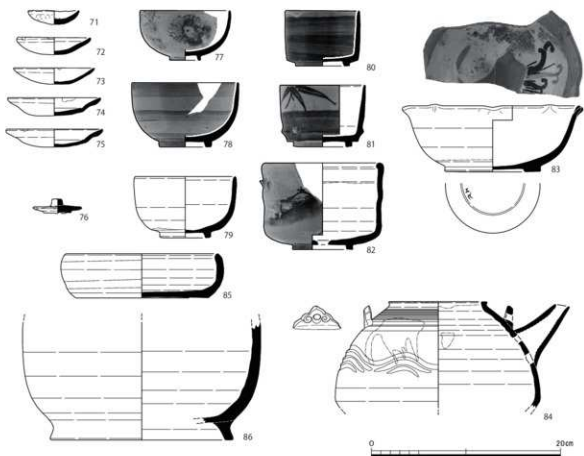
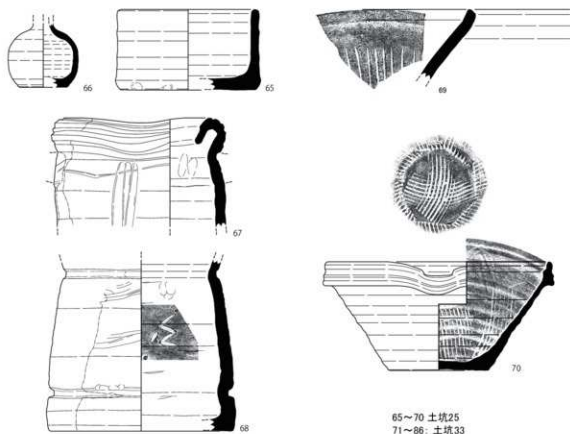


图16 出土物实测图4 (1:4)

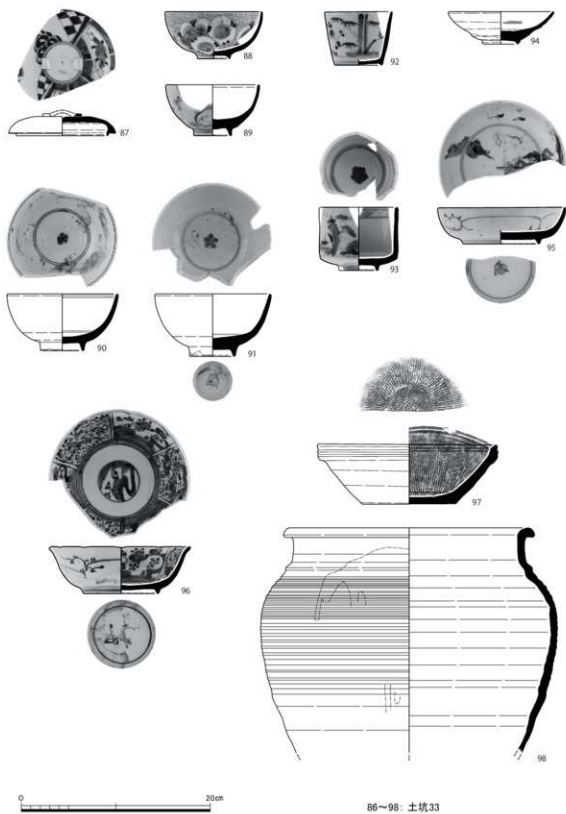


图 17 出土遗物实测图 5 (1 : 4)

3～4条の波状凹線を施す。98は甕。信楽産か。口径25.2cm。口縁部は直立して立ち上がり、口縁部は外反する。体部外面は並行沈線が多く入る。内外面全体に褐色を呈する柿釉を施し、肩部から体部の一部に黒色の釉を流し掛ける。

85・86は土師質土器。85は鉢。口径16.0cm、器高4.8cm、底径14.0cm。ロクロにより成形される。底部は平坦で、体部は湾曲して上方に立ち上がる。体部外面に煤が付着している。また、底部外面に離れ砂と考えられる砂が付着する。86は火鉢もしくは風炉か。高台径19.2cm。底部の端に外下方に延びる高台を貼り付ける。

87～96は染付。いずれも肥前系の染付である。87は段重蓋。天井部のつまみは欠損する。口径96cm、外縁部11.3cm、残器高2.4cm。外面は2区に区画し、市松文、花文を呉須で描く。87～90は碗。88は口径10.1cm、器高5.0cm、高台径3.4cm。外面に呉須による梅花文を描く。89～91はいわゆるくらわんか碗。89は口径9.8cm、器高5.4cm、高台径3.8cm。外面に呉須による花文を描く。90は口径11.5cm、器高7.0cm、高台径4.3cm。外面は青磁釉を施し、見込みに2条の圏線と五弁花を描く。91は口径12.1cm、器高6.6cm、高台径4.5cm。外面は青磁釉を施し、見込みに2条の圏線と五弁花、底部外面に渦福を描く。92は蕎麦猪口。口径7.0cm、器高5.7cm、高台径4.9cm。体部から口縁部はやや外上方に直線的に立ち上がる。外面に竹・笹文を描く。93は筒形碗。口径8.1cm、器高6.7cm、高台径4.1cm。底部から体部の立ち上がりは稜を持ち、体部は直線的に上方に立ち上がる。外面に山水、口縁部内面に四方禪文、見込みに2条の圏線とつぶれた五弁花を描く。94・95は皿。94は口径11.0cm、器高3.5cm、高台径3.6cm。底部は厚みがあり、体部から口縁部は内湾して立ち上がる。見込みは蛇の目状に釉剥ぎされる。体部内面に線状の呉須が残る。95は口径13.4cm、器高3.9cm、高台径8.0cm。外面に蔓文、内面に2条の圏線と山水、底部外面に渦福を描く。96は輪花鉢。口径14.7cm、器高5.0cm、高台径7.7cm。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。見込みに梅花文、体部内面は二本線により6区に区画し各区に梅花文を描く。体部外面に唐草文、底部外面に抽象化した文字を描く。

97は焼締陶器。備前の播鉢。口径18.9cm、器高6.3cm、底径10.0cmとやや小振りの播鉢である。体部内面に放射状の摺目を密に施し、見込みは「×」状の摺目を施す。口縁部は上下に拡張し、外面に2条の凹線が巡る。胎土は硬く焼き締まり、明赤褐色を呈する。

これらの遺物は13B段階に属する。

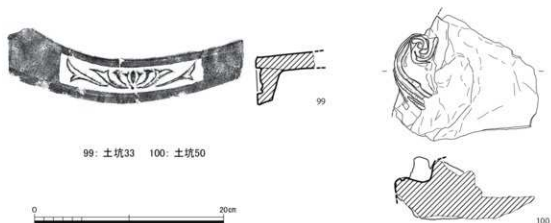
(2) 瓦 (図18 99・100)

瓦は中世、近世の瓦があり、古代の瓦は出土していない。中世の瓦は丸瓦、平瓦、道具瓦があり、軒瓦の出土は無かった。

99は軒椽瓦。小丸を欠く。土坑33から出土。100は鬼瓦片。土坑50から出土。

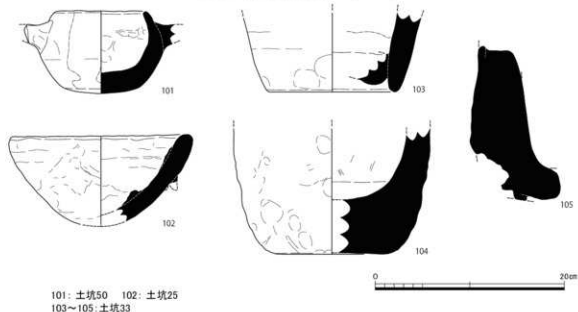
(3) 土製品 (図19 101～105)

101は取瓶。小型の鉢状を呈し、体部は丸みを持つ。土坑50から出土。102～104は埴塼。い



99: 土坑33 100: 土坑50

図18 出土遺物実測図6 (1:4)



101: 土坑50 102: 土坑25
103~105: 土坑33

図19 出土遺物実測図7 (1:4)

ずれも外面は被熱しガラス質となる。102は体部が緩く内湾して外上方に立ち上がる。103は筒形を呈し、体部下方の内面に底部を貼り付ける。104は底部が平坦で厚みを持ち、体部は上方に立ち上がる。102は土坑25、103・104は土坑33から出土。105は炉壁。内面は被熱しガラス質となるが、外面は熱を受けていない。胎土にスサが多く含まれる。

(4) 石製品 (図20 106~108)

106・107は硯。107は丘部に窪みがあるが、使用によるものかは不明である。108は石臼。半分が残存する。径19.5cm、高さ10.8cm。側面に一辺1.6cmの方形の孔を穿つ。軸穴は円形で、ほぼ中心に穿たれる。白面は、軸穴を中心に八分画され、残存する箇所には8~10本の溝が刻まれている。石材は不明である。

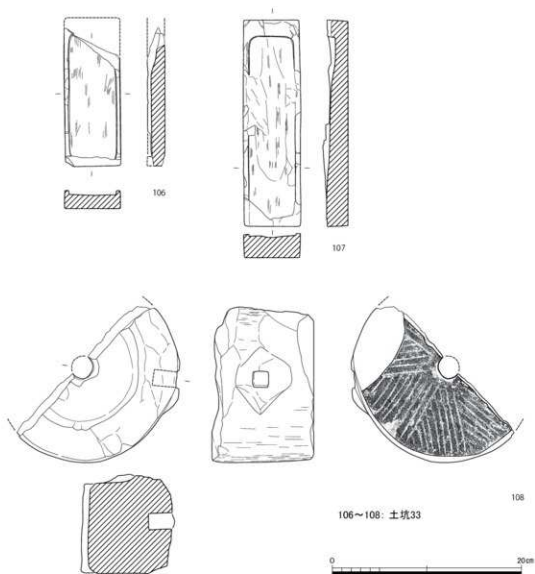


図20 出土遺物実測図8 (1:4)

(5) 木製品 (図21 109~117)

109は漆器碗。口縁部及び高台縁を欠く。底部は厚みがあり、体部は丸みを持って立ち上がる。外面に黒漆、内面に赤漆を施し、外面には草文を描く。土坑25から出土。110は曲物。口径9.4cm、器高8.9cm。内面全体に漆と思われる付着物があり、漆を入れる容器として使用された可能性がある。土坑25から出土。111・112は漆器蓋。111は径13.5cmの円形の蓋。底面の縁を段状に削り込み、合わせとする。表面に黒漆を施す。112は長さ19.5cm、幅15.0cmの方形の蓋。長辺の片側を方形に切り込む。裏面の短辺側に長さ12.7cm、幅0.8cmの棒状の材を打ち付け合わせとする。表面に黒漆を施し、裏面に「×」状の罫書線を入れる。111は土坑57、112は土坑25から出土。113は下駄。歯を削り出す速歯下駄。長さ19.8cm、幅8.1cm、高さ3.6cm。平面形は踵側が細くなる楕円形である。土坑25から出土。114・115は箸。いずれも土坑46から出土。116・117は荷札。116は上部2箇所に切り込みがあり下端部は平坦である。両面に117は片面の一部を欠く。上部角を

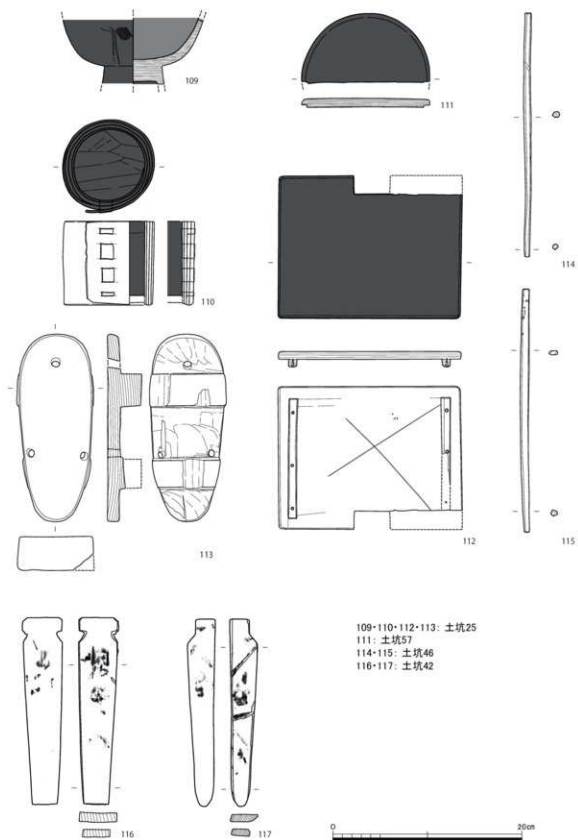


图21 出土遗物实测图9 (1:4)

切り欠き、下端部は尖らせている。片面に文字が記され、4乃至5文字と思われるが文字の判読は難しい。いずれも土坑42から出土。

(6) 獣骨 (図22)

第2-2面で検出した土坑25・50を中心に獣骨が出土している。骨1・2は牛の角。いずれも土坑25から出土。骨3は鹿の手足骨。骨4は鹿の肩甲骨。いずれも土坑50から出土。骨5は牛骨と考えられる。刃物により割り取られているが、製品として加工された痕跡はみられない。土坑25から出土。



図22 獣骨

図4 出土遺物観察表

図表 No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
1	磁種陶器	横皿		土坑 19	-	(1.6)	-	-	(胎) 5Y7/1 灰白 (釉) 10Y6/2 オリーブ灰	
2	土師器	つばつば		土坑 30	2.2	2.5	-	-	2.5Y7/2 灰黄	
3	土師器	皿N		土坑 30	5.0	1.1	-	-	2.5Y7/1 灰白	
4	土師器	皿S		土坑 30	9.9	2.1	-	-	10YR7/3 に近い黄緑	
5	土師器	皿S		土坑 30	11.0	2.3	-	-	7.5YR7/3 に近い黄	
6	土師器	皿S		土坑 30	11.9	2.1	-	-	7.5YR6/2 灰黄	
7	土師器	皿S		土坑 30	11.9	2.1	-	-	10YR6/2 灰黄褐	
8	磁種陶器	皿		土坑 30	11.4	4.1	4.6	-	(胎) 2.5YR/2 灰黄 (釉) 5Y6/2 灰オリーブ	吉津
9	磁種陶器	丸皿		土坑 30	7.8	1.7	4.8	-	(胎) 2.5Y7/2 灰白 (釉) 2.5Y7/3 灰黄	瀬戸
10	磁種陶器	横		土坑 30	10.4	6.1	4.6	-	(胎) 2.5YR/1 灰白 (釉) 2.5YR/2 灰白	
11	磁種陶器	天目茶碗		土坑 30	11.1	7.3	4.4	-	(胎) 5Y7/1 灰白 (釉) 10YR17/1 黒色	瀬戸
12	磁種陶器	向付		土坑 30	-	4.4	-	-	(胎) 2.5YR/1 灰白 (釉) 2.5Y7/2 灰黄	織部
13	染付	横		土坑 30	-	(2.6)	4.1	-	(胎) 10YR8/1 灰白 (釉) 2.5YR/1 灰白	陶船染付
14	磁種陶器	壺		土坑 30	9.6	(9.0)	-	-	(胎) 5YR6/3 に近い黄 (釉) 10YR3/4 に近い黄褐	
15	焼締陶器	深鉢		土坑 30	25.5	13.2	13.0	-	7.5YR4/2 灰黄	信楽
16	土師器	皿S		土坑 32	9.2	2.3	-	-	7.5YR7/2 明褐色	
17	土師器	皿S		土坑 32	9.6	2.4	-	-	7.5YR7/2 明褐色	
18	磁種陶器	天目茶碗		土坑 32	11.2	5.8	4.2	-	(胎) 2.5YR/1 灰白 (釉) 7.5YR2/3 極黄褐	瀬戸
19	磁種陶器	天目茶碗		土坑 32	11.9	6.6	5.0	-	(胎) 10YR7/3 に近い黄緑 (釉) 5YR3/4 暗赤褐	瀬戸
20	磁種陶器	丸皿		土坑 32	11.5	2.6	6.2	-	(胎) 10YR7/1 灰白 (釉) 10YR8/1 灰白	志野
21	磁種陶器	向付		土坑 32	13.8	5.8	8.3	-	(胎) 5YR/1 灰白 (釉) 2.5YR/1 灰白	志野
22	磁種陶器	横		土坑 42	10.5	6.6	4.1	-	(胎) N7/0 灰白 (釉) 7.5Y5/3 灰オリーブ	
23	磁種陶器	大皿		土坑 46	25.8	7.3	20.6	-	(胎) 2.5Y7/2 灰黄 (釉) 2.5YR/1 灰白	志野
24	焼締陶器	四耳壺		石室 40	9.9	(16.6)	-	-	2.5YR4/2 灰赤	
25	土師器	つばつば		土坑 25 上層	2.2	2.6	-	-	2.5Y7/2 灰黄	
26	土師器	皿N		土坑 25 上層	6.0	1.4	-	-	2.5YR/2 灰白	
27	土師器	皿N		土坑 25 上層	6.5	1.3	-	-	7.5YR7/4 に近い黄	
28	土師器	皿S b		土坑 25 上層	9.8	2.5	-	-	7.5YR7/4 に近い黄	
29	土師器	皿S		土坑 25 上層	10.7	2.1	-	-	7.5YR8/2 灰白	
30	土師器	皿S		土坑 25 上層	10.9	2.0	-	-	10YR5/2 灰黄褐	
31	土師器	皿S		土坑 25 上層	11.1	2.3	-	-	2.5Y7/3 灰黄	
32	土師器	皿S		土坑 25 上層	11.3	2.3	-	-	10YR7/3 に近い黄緑	
33	土師器	皿S		土坑 25 下層	11.5	2.4	-	-	5YR6/2 灰黄	
34	土師器	皿S		土坑 25 上層	11.4	2.4	-	-	10YR7/3 に近い黄緑	
35	土師器	鉢		土坑 25 上層	27.7	(5.9)	-	-	5YR7/3 に近い黄	
36	土師器	焼灰歯差		土坑 25 上層	6.8	2.2	-	-	2.5YR5/3 に近い赤褐	
37	土師器	焼灰歯差		土坑 25 上層	5.0	9.0	6.0	-	5YR6/4 に近い黄	
38	土師器	焼灰歯差		土坑 25 下層	4.8	8.4	4.4	-	5YR6/3 に近い黄	
39	染付	小杯		土坑 25 上層	11.3	(3.0)	-	-	(胎) N8/0 灰白 (釉) 灰黄	輸入
40	染付	横		土坑 25 下層	-	(3.1)	4.5	-	(胎) 2.5YR/1 灰白 (釉) 5YR/1 灰白	輸入
41	染付	横		土坑 25 下層	17.6	(7.0)	-	-	(胎) 5Y7/1 灰白 (釉) 5YR/1 灰白	輸入
42	染付	大皿		土坑 25 上層	-	(1.5)	12.6	-	(胎) 7.5YR8/3 灰黄緑 (釉) 5YR/1 灰白	輸入
43	瓦質土器	不明品		土坑 25 下層	直径 4.2	-	-	1.6	N3/0 暗灰	土製円盤?
44	磁種陶器素地	横		土坑 25 上層	-	(2.3)	6.6	-	10YR7/3 に近い黄緑	

掲載 No	品種	形状	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
45	施釉陶器	小鉢		土坑25上層	97	58	39		器) 75YR5/2灰褐 輪) 5Y4/3藍オリーブ	焼津
46	施釉陶器	椀		土坑25下層	105	63	41		器) N7/0灰白 輪) 75Y4/2灰オリーブ	焼津
47	施釉陶器	皿		土坑25上層	120	44	5.0		器) 10R5/4赤褐 輪) 5YR3/2暗赤褐	焼津
48	施釉陶器	丸皿		土坑25上層	124	32	5.0		器) 25Y7/1灰白 輪) 5Y6/2灰オリーブ	焼津
49	施釉陶器	皿		土坑25上層	127	33	4.8		器) 25Y7/2灰黄 輪) 25Y5/3黄褐	焼津
50	施釉陶器	徳利		土坑25上層	3.3	(57)	-		器) 5YR5/1灰灰 輪) 5Y8/1灰白	焼津
51	施釉陶器	戸付		土坑25下層	122	48	4.4		器) 5YR6/4に赤い稜 輪) 5YR4/2灰褐	
52	施釉陶器	戸付		土坑25上層	124	49	3.8		器) 25YR5/3に赤い赤褐 輪) 75YR5/2灰褐	焼津
53	施釉陶器	戸付		土坑25下層	111	39	3.8		器) 10YR7/3に赤い黄褐 (外周) 75YR5/4に赤い褐 輪) 25Y8/1灰白	焼津
54	施釉陶器	戸付		土坑25下層	105	48	4.7		器) 75YR7/4に赤い赤褐 輪) 25Y7/1灰白	焼津
55	施釉陶器	天目茶碗		土坑25上層	115	70	4.5		器) 25Y8/1灰白 輪) 10YR1/2/1黒	瀬戸
56	施釉陶器	天目茶碗		土坑25上層	115	66	4.6		器) 25Y7/1灰白 輪) 10YR2/2黒褐	瀬戸
57	施釉陶器	椀		土坑25上層	118	71	5.3		器) 5Y8/1灰白 輪) (輪縁) 75YR3/4暗 褐 (底縁) 10YR1.7/1黒	瀬戸
58	施釉陶器	丸皿		土坑25上層	116	32	6.1		器) 25Y8/2灰白 輪) 灰緑色	瀬戸
59	施釉陶器	丸皿		土坑25下層	115	28	7.1		器) 5Y8/1灰白 輪) 25Y8/2黄黄	志野
60	施釉陶器	菊皿		土坑25上層	119	29	6.8		器) 75YR8/1灰白 輪) 25Y8/1灰白	志野
61	施釉陶器	菊皿		土坑25上層	118	33	6.7		器) 75Y8/1灰白 輪) 75Y8/1灰白	志野
62	施釉陶器	皿		土坑25下層	110	26	6.6		器) 25Y8/1灰白 輪) 25Y8/2灰白	志野 漆付着
63	施釉陶器	戸付		土坑25上層	-	(23)	6.4		器) 5Y8/1灰白 輪) 25Y8/1灰白	志野
64	施釉陶器	灯明具		土坑25上層	75	(47)	5.1		器) 25Y7/1灰白 輪) 25Y8/1灰白	織部
65	煮用具	押鉢		土坑25上層	140	85	14.3		5YR5/4に赤い赤褐	
66	焼酎陶器	小壺		土坑25上層	-	(68)	5.0		10R5/2灰赤	備前
67	焼酎陶器	水甌		土坑25下層	155	(115)	-		75Y8/1灰白	伊賀
68	焼酎陶器	水甌		土坑25下層	-	(181)	19.4			伊賀 筒介はしないが 67と同一個体 内面へ 9記号
69	焼酎陶器	搦鉢		土坑25下層	-	(74)	-		75YR6/4に赤い稜	丹波
70	焼酎陶器	搦鉢		土坑25上層	234	115	107		75YR4/3褐	
71	土師器	皿N		土坑33	53	15	-		75YR7/4に赤い稜	
72	土師器	皿S		土坑33	76	18	-		75YR8/3浅黄褐	
73	土師器	皿S		土坑33	84	18	-		75YR7/4に赤い稜	
74	土師器	皿S		土坑33	97	19	-		25Y8/1灰白	
75	土師器	皿S		土坑33	101	19			10YR8/2灰白	
76	施釉陶器	蓋		土坑33	29	15	最大径5.2		器) 25Y7/1灰白 輪) 25Y4/4オリーブ褐	
77	施釉陶器	椀		土坑33	94	53	3.3		器) 25Y8/2灰白 輪) 5Y7/2灰白	土粒 赤・青・金
78	施釉陶器	椀		土坑33	110	68	5.5		器) 10YR8/2灰白 輪) 5Y7/1灰白、75Y5/1 灰	鉄粒
79	施釉陶器	椀		土坑33	106	65	5.2		器) N7/0灰白 輪) 10G17/1暗緑灰	
80	施釉陶器	筒形椀		土坑33	96	59	5.7		器) N7/0灰白 輪) 10Y7/1灰白	下唇に鉄粒あり
81	施釉陶器	筒形椀		土坑33	88	66	6.2		器) 5Y7/1灰白 輪) 5Y7/3浅黄	
82	施釉陶器	香炉		土坑33	122	92	6.5		器) 25Y7/1灰白 輪) 5Y7/3浅黄	榎木跡に転用・穿孔
83	施釉陶器	輪花鉢		土坑33	182	70	100		器) 25Y7/1灰白 輪) (外周) 25Y6/1黄灰(内 面) 25Y8/2灰白	高台内「上代」(定輪)

図録 No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	厚 (cm)	色調	備考
84	陶輪陶器	土瓶		土坑 33	104	(112)	-		(胎) 75YR6/4 にふい橙、 75YR6/2 灰褐色 (釉) 75YR2/3 他暗紫、 5Y4.3 暗オリーブ	
85	土師質	鉢		土坑 33	16.0	4.8	14.0		25YR8/2 灰白	
86	土師質	六鉢		土坑 33	-	(125)	19.2		75YR7/3 にふい橙	
87	染付	蓋		土坑 33	96	(24)	外縁径 11.3		(胎) N8/0 灰白 (釉) 灰黒	
88	染付	碗		土坑 33	10.1	5.0	3.4		(胎) N8/0 灰白 (釉) 灰黒	
89	染付	碗		土坑 33	98	5.4	3.8		(胎) N8/0 灰白 (釉) 灰黒	
90	青磁染付	碗		土坑 33	11.5	7.0	4.3		(胎) N8/0 灰白 (釉) (外面) 5YR7/1 明オ リーブ灰 (内面) 灰黒	
91	青磁染付	碗		土坑 33	12.1	6.6	4.5		(胎) N8/0 灰白 (釉) (外面) 7.5GY7/1 明 緑灰 (内面) 灰黒	
92	染付	番麦瓶口		土坑 33	7.0	5.7	4.9		(胎) N8/0 灰白 (釉) 灰黒	
93	磁器	碗		土坑 33	8.1	6.7	4.1		(胎) N8/0 灰白 (釉) 灰黒	
94	染付	皿		土坑 33	11.0	3.5	3.6		(胎) N8/0 灰白 (釉) 5GY8/1 明緑灰	
95	染付	皿		土坑 33	13.4	3.9	8.0		(胎) N8/0 灰白 (釉) 10YK/1 灰白 灰黒	
96	染付	輪花鉢		土坑 33	14.7	5.0	7.7		(胎) N8/0 灰白 (釉) 灰黒	
97	焼締陶器	磁鉢		土坑 33	18.9	6.3	10.0		5YR5/6 明赤褐色	備前
98	陶輪陶器	甕		土坑 33	25.2	(238)	-		(胎) 10YR7/1 灰白 (釉) 5YR3/2 暗赤褐色、 10YR2/2 黒紫	信楽
99	瓦	軒瓦		土坑 33	長 (6.1)	幅 (25.0)	瓦厚 5.0		N3/0 暗灰	
100	瓦	鬼瓦		土坑 50	縦 13.3	横 15.2	高 (6.7)		N4/0 灰	
101	土製品	埴輪		土坑 50	96	8.8	7.8		N2/0 黒色	把手 1ヶ所残存
102	土製品	埴輪		土坑 25 上層	18.7	-	-		25Y7/1 灰白、N4/0 灰	
103	土製品	埴輪		土坑 33	-	(8.5)	13.2		5Y7/1 灰白	
104	土製品	埴輪		土坑 33	-	(13.3)	14.0		N4/0 灰	
105	土製品	中環		土坑 33	-	(15.3)	-		75YR7/3 にふい橙	表面は自然腐付着により 酸化 (灰緑)
106	石製品	硯		土坑 33	長 (14.7)	幅 6.0		1.9		
107	石製品	硯		土坑 33	長 21.8	幅 6.1		(2.7)		
108	石製品	石臼		土坑 23	直径 19.5			108		重さ 496g
109	木製品	漆器椀		土坑 25 F層	-	(7.0)	-			内面 赤漆 外面 黒漆
110	木製品	曲物		土坑 25 上層	9.4	8.9	9.3			内面口縁黒漆少?
111	木製品	蓋		土坑 37	13.5			1.0		外面 黒漆
112	木製品	蓋		土坑 25 上層	縦 15.0	横 19.5		1.6		内面 縦割 外面 黒漆
113	木製品	下駄		土坑 25 F層	縦 19.8	横 8.1		2.6		
114	木製品	箸		土坑 46	縦 25.8	横 0.8		0.6		
115	木製品	箸		土坑 46	縦 25.7	横 0.9		0.7		付着物 (黒漆少?)
116	木製品	木簡		土坑 42	縦 19.8	横 4.3		1.0		腐孔 黒漆あり
117	木製品	木簡		土坑 42	縦 19.8	横 2.9		0.8		腐孔 黒漆ありか?

第IV章 まとめ

今回の調査では、鎌倉時代以前の遺構は検出されず、同時期の遺物もほぼ皆無の状況であった。それは、第3面で検出した地山を掘り込む土取穴群により消失したものと考えられる。その土取穴群の時期については、土坑59・61から室町時代後半の瓦、土坑52・57から江戸時代初頭の陶磁器類が出土している。

第2面では、江戸時代初期の廃棄土坑が検出された。本調査地は天正地割により新たに開かれた間之町通に面する町屋の裏手にあたり、検出した廃棄土坑は同町屋で発生した廃棄物を処理したものと考えられる。調査区東半で検出した土坑25の断面観察では、遺物を含む埋土が西から東に傾斜しながら層状に堆積する状況が確認でき、間之町通に面した町屋側から廃棄物を投棄していった状況と判断できる。これらの廃棄土坑から出土した陶磁器類には、志野・唐津産の向付・大皿、天目茶碗、水差しといった茶陶類がみられ、居住者の生活水準の高さを伺わせる。また、これらの陶磁器類とともに、取鍋・埴塼といった鑄造に関する遺物や、内面に溶いた漆が付着する志野皿(図15 62)や曲物(図21 110)といった漆工に関する遺物が出土している。寛永元年(1624)～同三年(1626)の間に刊行されたと推測される「都図」(『慶長昭和京都地図集成』所収)には間之町通の二条・押小路通間に「きせるや町」の記述があり、調査地周辺にはこうした手工業生産の工房が存在した可能性がある。また、廃棄土坑からは牛の角や骨、鹿の手足骨や肩甲骨などの獣骨も出土している。一部、刃物により割り取られたものもあるが、食用なのか加工材なのかは不明である。

第1面では江戸時代後半～幕末の遺構を検出した。検出遺構は井戸・石室・廃棄土坑が中心で、町屋の裏手である状況に変化はない。廃棄土坑である土坑33からは、土器・陶磁器類とともに埴塼・炉壁・鉞滓(銅?)といった鑄造に関する遺物が多く出土し、付近に鑄造工房が存在したと想定される。また、溝41は町屋の敷地境界に伴うものと考えられる。溝41の東延長は現在の敷地境界とはほぼ一致することから、天正地割の痕跡とも考えられるが、遅くとも江戸時代後半の地割が現在まで引き継がれていると考えられる。

以上、今回の調査では天正地割以降の町屋裏手に設けられた廃棄土坑の調査が中心となった。廃棄土坑からは、居住者の生活水準の高さを伺わせる陶磁器類とともに、鑄造関連資料や漆工関連資料といった手工業生産工房の存在を示唆する遺物も出土している。調査地の周辺では、天正地割により町屋が再編され、江戸時代以降様々な職商が展開していくが、今回の調査成果はそうした街並みの状況を復元する一助となる資料を得たものと考えられる。

图 版



1. 第1-1面全景 (西から)



2. 井戸28 (南東から)



1. 第1-2面全景 (西から)



2. 溝41 (東から)



3. 石室40 (北から)



1. 第2面全景 (西から)



2. 土坑46・48状況 (北から)



1. 土坑25・50 (南から)



2. 土坑25遺物出土状況 (東から)



1. 第3面全景（西から）



2. 第3面土坑群掘削状況（南から）



1. 調査区北壁断面 (南から)



2. 調査区南壁断面 (南から)



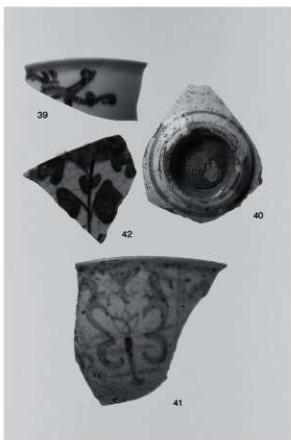
1. 出土遺物 1 (土坑50)



2. 出土遺物 2 (志野)



1. 出土遺物3 (土坑25出土土師器・土製品)



2. 出土遺物4 (土坑25出土染付)



3. 出土遺物5 (土坑25出土唐津)



1. 出土遺物 6 (土坑25・50出土志野)



2. 出土遺物 7 (土坑25出土天目茶碗)



1. 出土遺物8 (土坑25出土燒締陶器)



2. 出土遺物9 (燒締陶器 四耳壺)



3. 出土遺物10 (燒締陶器 播鉢)



1. 出土遺物11 (土坑33出土土師器・土師質土器)



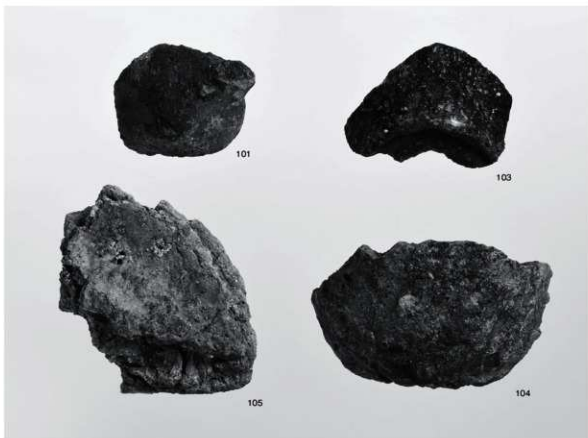
2. 出土遺物12 (土坑33出土施釉陶器 甕)



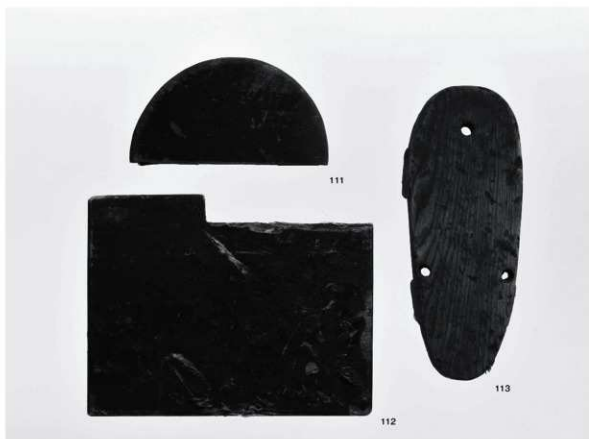
3. 出土遺物13 (土坑33出土施釉陶器)



1. 出土遺物14 (土坑33出土染付)



2. 出土遺物15 (塔塌・如壁)



1. 出土遺物16-1 (木製品 蓋・下駄-表)



2. 出土遺物16-2 (木製品 蓋・下駄-裏)



1. 出土遺物17-1 (土坑42出土荷札)



2. 出土遺物17-2 (土坑42出土荷札)



3. 出土遺物18 (漆器 椀)



4. 出土遺物19 (曲物)

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうしほういっちょうあとはくつちょうさほうこくしよ							
書名	平安京左京三条四坊一町跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	大西見靖							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2021年12月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京左京 三条四坊 一町跡	京都市中京区 間之町通二条 下ル鍵屋町 488・492 押小路通高倉 西入左京町135	26100	1	35度 00分 45.3秒	135度 45分 43.2秒	2021年 8月20日 ～ 9月24日	88㎡	病院建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京三条 四坊一町跡	都城	室町時代後半 ～ 江戸時代初頭	土坑	瓦		・江戸時代初頭の廃棄土坑より茶陶を含む土器陶磁器類と共に、鋳造関連資料・漆工に関する資料・獣骨などが出土した。		
		江戸時代初頭	土坑	土師器 焼締陶器 瀬戸美濃 唐津 輸入陶磁器 土製品 木製品 骨		・江戸時代後半の廃棄土坑から土器陶磁器類とともに埴壇・如壺・銅と思われる銅滓など鋳造関連資料が多く出土した。		
		江戸時代後半	溝 井戸 石室 土坑	土師器 焼締陶器 施釉陶器 染付 瓦質土器 瓦 土製品 木製品 石製品 金属製品 骨・貝殻		・中世末～近世初頭の土取穴による擾乱のため、中世以前の遺構面は消失していた。		

文化財サービス発掘調査報告書 第21集

平安京左京三条四坊一町跡
発掘調査報告書

発行日 2021年12月28日

株式会社 文化財サービス

編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58

TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社

印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る

TEL 075-256-0961